
無関心の災厄

シラネアオイ

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心の災厄

シラネアオイ

【Nコード】

N5443G

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

オレにはちよつと変わった同級生がいる。ソイツは、ちよつとぼーっとしている、一見無邪気な17歳男。きっとソイツはオレを非日常と災厄に導く張本人。 「春・花小説企画」参加作品です

・ ・ ・ サヨナラの日のプロローグ（前書き）

この作品は、「春・花小説」企画に参加しています。30名以上の方が花や花言葉をモチーフにした作品を展示されますので、ぜひHPの方へもお越し下さい。

では、長くなると思いますが、最後までお付き合いいただけると幸いです。

・ ・ ・ サヨナラの日のプロローグ

サクラを見ると、思い出す光景がある。
それはまだ新しい去年の春の記憶。

「マモルちゃんっ」

感傷に浸りかけた瞬間、オレの腰をものすごい衝撃が襲う。

全く……！

振り向いたオレの目に飛び込んだのは、両手に花束を抱え、ここにこと笑う愛らしい先輩の姿だった。

「……先輩、後ろから突然タツクルかますのはやめてください。そのうちオレの腰が折れますから」

怒鳴るつもりが毒気を抜かれ、やんわりと、あくまでやんわりと先輩を押しとどめたオレはふう、とため息をつく。

頭のとっぺん近くに纏めた髪が跳ねていて、オレの目の前でふわふわと揺れた。

両手いっぱいの花束を見て思い出す　そう、今日は卒業式。今も窓から見える校庭では多くの卒業生たちが集団で写真を撮ったり別れを惜しんだりと忙しなく動き回っている。

部室の窓から綻び始めたサクラを見ていた在校生のオレに恨みでもあるのか、卒業生の集団に混じることなく、全身全霊の突撃を決行したのは、文芸部の3年生、枝守スミレ。えだもり

「ご卒業おめでとうございます」

「ふふ、マモルちゃんでも寂しそうな顔するんですねっ。ありがとうございます。でも、残念ながら似合わないのですよ？」

「……ちょっと黙ってください、先輩」

ああもう、黙っていれば愛らしいこの容姿、もったいないとしか

言いようがない。

珍しくちゃんと制服に身を包んでいる彼女の中身が到底見た目通りでない事を、オレがよく知っていると。も。

ところが、大きな瞳でオレを見上げた枝守スミレ18歳女は、先ほどまでオレが見つめていたサクラの木を指差して首を傾げた。

校庭にぼつりと佇むそれは、何年も前の卒業生が遺した卒業記念樹らしい。

「マモルちゃん、あの木の下、誰かいるのです」
先輩の指さした先、オレは目を疑った。

満開とは言えない淡い桃色の花の下、銀色の毛並みが揺れていた。
「……梨鈴^{りりん}」

思わず口から零れた名は、春を運ぶ澄んだ風に紛れて消えていったが、オレの足は考えるより先に動いていた。

あの影は
「ちよつと、マモルちゃん！ どこ行くのですう?!」

叫ぶ先輩の声を背中で聞き流しながら、部室から飛び出して、靴を履き替えるのもそこに校庭を駆け抜ける。

銀色の毛並み それは、珪素生命体^{シリカ}である証。
珪素生命体^{シリカ}は、オレたち炭素生命体^{タンソ}とは生命体としてのレベルで

一線を画す、珪素ベースに創られた新規生命体。その姿は総じて人間に近いが、耳や尾、目などの様々な箇所が獣を模している。

そんな珪素生命体^{シリカ}の一人が、つい1年前までこの桜崎高校でオレたちと共に在った。

だからこそ、桜の木の下に銀色の毛並みを見たオレは走り出していたのだ。

しかし、卒業証書を手に友達と記念撮影をする卒業生たちの間を縫い、息を整えながらサクラの樹の下に到着したオレの目の前に、銀の毛並みを持つケモノの姿はなかった。

ただ、咲き始めのサクラがひらひらと花びらを落とすだけだ。

いったいオレは銀色に何を期待したんだ。

「……まさかな」

姿かたちだけでなく生活も獣に近い珪素生命体は、本来ならいわゆる『人里離れた山奥』で自然と共にひっそりと暮らしているはずだ。郊外とは言え都内、私立桜崎さくらざき高校の敷地内に現れるはずはない。天然記念物のイリオモテヤマネコが東京都のド真ん中で飼育されているくらいにあり得ない。

そんなイレギュラーは、一人のキツネ少女だけで十分だ。

オレは自分自身を嘲笑わらいながら、サクラの幹に手をあてて目を閉じた。

卒業式が行われた、まだもう少し肌寒い日の出来事だった。

サクラを見ると、思い出す光景がある。

それは、あの意地っ張りなキツネの最後の笑顔

01：新学期と災厄のハジマリ

ああ、なんてこった。

これは突っ込むべきか、突っ込まざるべきか。

オレは背を丸めてじつと机の木目を見つめ、自問自答していた。

そうだな、つい先日卒業してしまった『名付け親^{ゴッドファーザー}』枝守スマレに

『口先道化師』というありがたくもありがたくない称号をいただいたオレとしては、一応突っ込んでおくべきだろう。

「ベタすぎる……」

ああ、突っ込みにも力が入らない。

その原因はオレの隣の席にある。

今日は新学期最初の登校日、いわゆる始業式というヤツが終了した教室。また高校3年ともなるとクラス替えて騒ぐのもアホらしい、それぞれに知人を見つけ、普段の昼休みと変わらない様相を呈していた。

無論、ベタだ、というには全く別の理由がある。

新学期の転校生が無口な美少女、ここまでではよかったのだが、なぜだかオレの隣の席に。そして、その転校生が、ひたすらオレに視線をくれているというこの状況。

肩甲骨を隠すほどの艶やかな黒髪を臙脂色のバレッタで留め、深緑のブレザー制服をきつちりと着こなす和風美人、見られているのが睨まれているのか、オレには見当もつかないような無表情。

助けてくれ。空気をくれ。息がつまりそうだ。

誰でもいいから。この際、腹がたつほどマイペースな同級生でも、この間卒業した半端敬語の可愛い先輩でもいい。マイペースの方は何故か始業式が終わってなお一度も姿を見せていないのだが、オレが張り紙を見間違えていない限り同じクラスであり、アイツとオレの縁がそんな簡単に切れるものではない事も重々承知している。

とりあえずホームルームが終了して、新年度最初の清掃が始まる

までの時間、オレの代わりにこの熱視線を受け止めてくれ！

オレの焦燥に反して、周囲は気づいていながらこの状況に口を挟めないでいるようだ。個人携帯端末をいじったり、何となく遠巻きに見つめてみたり、完全に無視して集団で話し込んだり。

気になっている事は確かだろうが。

転校生が来たらとりあえず話しかける優等生はこのクラスに存在しないのか？！

と、あきらめかけたその時。

「おはよう、マモルさん」

おお、オレの名を呼ぶ救いの神の声！

起き上ったオレの目には、声から予想した通りの間抜け面が飛び込んできた。香城夙夜^{いんぎょうしやくや}、今この瞬間限定でオレの救世主にしてオレ以外では唯一の文芸部員。

「ああ、おはよう……っってお前、とつくのとうに始業式は終わってんだぞ？」

「うん、だから、そうじゃないかと思っこの時間に来たんだ」

確信犯かこんちくしょう。

それでも始業式に出席しなくても掃除には来るのだから、ある意味真面目なのか？

超絶マイペースなオレの同級生は、先輩が卒業してからはオレとたった二人の文芸部員となるのだが、いつも通りのへらへらとした笑顔でオレを見下ろしていた。

「香城くん^{いんぎょうくん}、おはよう。遅かったわね」

「おはよう」

クラスメイトにひらひらと手を振って、マイペース男はオレの前の席に座った。

始業式当日にネクタイをしてこないのもそうだが　とりあえず

夙夜、そこはお前の席じゃねえ。

熱視線にやられて声も出ないオレの代わりに、クラスメイトの『才女』萩原加奈子^{はぎわらかなこ}が困ったように夙夜に告げる。

「香城くん、君の席は向こうの端っこの一番後ろ。そこは原田くんの席だから移動してくれる?」

「んー、それじゃ、そのハラダくんと席を代わってもらうことにするよ」

どさりと鞆を机に置いて、夙夜は席を占領した……すまん、原田。窓側の最後尾という最高の立地条件の席を提供するから許してくれ。席に戻ってきた原田は、多少文句は言ったものの、萩原の説得に応じてしぶしぶ席を移動した。

ほんとにすまん、原田。

それに免じて、今の一連のやり取りで分かってしまった、オマエが萩原に好意を寄せているという事実は隠蔽してやるから。

「ところでさ、さっきから聞きたかったんだけど」

夙夜はさっきからオレが見ないようにしていた方向を向いた。

ああ、前言撤回。コイツは救いの神でもなんでもねえ。

「何でこの子、マモルさんのことずっと睨んでるの?」

そしてオレは柊護^{ひいらぎ}17歳男、文芸部所属、このマイペース男に振り回される苦勞人（自称）。

頼むからこれ以上オレの周囲をかき回さないでくれ。

思わず顔を手で覆ってしまったオレに周囲の状況は分からないが、どうやら才女である萩原を持ってさえ触れられなかった話題にあっさりとは切り込んだことで、教室全体の空気が氷点下まで冷えたのは確かだ。

ちくしょう、これはオレのせいじゃないぞ！ 全くタイミングを考えないこのマイペース野郎のせいだからな！

「それに、君はもしかして……あ、やっぱりこれはいいや」

途中まで言いかけた言葉を飲み込んだ夙夜は、何の話だっけ、と首をかしげてしまったようだ。

このマイペース男が勝手に脳内処理して片付ける問題の多いこと多いこと。ただし、脳内処理だけで片付いていった問題をすべて口にすれば、人間から逸脱するほどのモノになることも知っている

がな。

だからといって途中でやめんな、バカ野郎。この凍りついた空気をどうしてくれる……！

仕方ないのだ、巻き込まれるのがオレの性分なのだから。

涙目でおそろおそろ顔をあげると、隣の席の転校生がすっきりとしたアーモンド型の目でオレを睨みつけていた。

ひい！ やっぱ無理！ 口先だけのオレには無理！

彼女は先ほどの自己紹介と同じ、淡々とした口調と消えそうな声で最初の質問に答えた。

「……知っている人に似ていたから、気になっただけです」

それ睨む理由じゃないんですけどー？！

「あなたが」

和風美人はオレを指差した。

ヒトを指さしちやいけませんって小学校で習いませんでしたかー

?!

「私の知っている人にとってもよく似ています」

これ、アレですか？ 新手のナンパですか？ 教室で？ 何狙い

ですか？ 自分で言うのもなんだが夙夜と違って普通の高校生だから残念だけど金なんてないからな？！

ってまあ、相手が無表情美人じゃなければ得意の『口先道化師』が炸裂するんだが、今のオレは完全に委縮している。

へビに睨まれたカエル、マンガースとハブ、ネコとネズミ、無表情美人と口先道化師。

「そうなの？ よかったじゃない、柊くん」

いや、それ、ちょっとチガウヨ、才女萩原。

見つめているわけじゃないからね、この美人。睨んでるからね、確実に。

「うん……そか、そうだね。そうなんだね」

ところが夙夜は一人、うんうんと頷いてにこりと笑った。

さっきは何か言いかけてやめるし、今度は一人で納得……あとで

とつちめる必要がありそうだな、こりゃ。

「お名前を聞いてもいいかな？」

夙夜がにこにこと転校生に尋ねた。

おお、スゲエぞ夙夜。その図太さを今だけは称賛してやろう……
今だけは。

だが、オマエが遅刻したさっきのホームルームで自己紹介は終わ
ってるからな。一応忠告しておくが。

ああ、今日は調子が出ない。声も出ない。何もかもこの転校生の
せいだ！

「白根葵しらいね あおいです」

その美少女転校生が、ぽつりと名を呟いた瞬間が、きっとその始
まり。

オレの受難の始まり。

「シラネアオイ……『完全な美』だね」

またも意味不明な言葉で笑ったコイツはオレを災厄に放り込む天
才だ。

見る、転校生の表情を！ って、さっきから表情が微塵も動いて
ねえよお！

「よろしく、アオイさん」

笑顔で握手を求めるコイツの神経だけは信じられない。

ああ、最悪のハジマリだ。

まだ始まりだったのに、もうバッドエンドまで見通せそうじゃね？

そんな事を考えていたからだろうか。

人生最悪のイベントってのが早速やってきやがった。

次の日、つまり始業式の次の日、オレたちを待っていた現実は、
警察に占領され、閉ざされる桜崎高校の門扉だったのだから。

02 : 奈落と終焉の序奏（前書き）

なんとなく残酷描写かもしれませんが。
警告出すほどじゃないですが。

02 : 奈落と終焉の序奏

コトのハジマリは簡単だ。

校舎の角を曲がった。

そしたら、ヒトが死んでいた。

ただ、それだけらしい。

言葉にしてしまえばたったそれだけの事なのだ。

偶然にも……いや、教室で雑談していた夙夜が騒ぎに勘づいたのだから必然だろう。オレと夙夜は、のこのこと騒ぎの中心へ出掛けて行き、凄惨な現場を直視するという愚行を犯してしまった。

どうやら人間、驚き過ぎると思考が停止するらしい。

「……萩原」

校舎裏に集まった生徒たちの悲鳴が飛び交う中、オレがかろうじて呟いたのはそんな言葉だった。

なにしろ、そこに血塗れで倒れていたのはオレのクラスメイトだったから。

素人目にも分かる、致命傷は喉の傷だ。

目にするのも憚られるほどにはつくりと開いた傷口は、もはや傷口とは呼べないだろう。血が流れ切って気道や血管の断面が見えるほどのアレは、首を切断したと言った方が正しい。ほとんど皮と肉一枚でつながっているだけの、絶対的切断面。

オレは自分の視力のよさを呪った。

隣で佇む夙夜ほどじゃないが、オレはこれでもメガネ・コンタクトの類とは無縁の生活を送っている。別にそれは勉強しなかったから、とかそう言うわけじゃないんだが。

一発目で直視してしまったオレは、全身の血が頭からつま先までざあっとひき、体温が下がるのを感じた。すぐに目を逸らしたのに、くつきりと脳裏に焼き付いてしまったのは仕方がないかもしれない。

周囲には悲鳴と泣き声が散乱し、それがさらに傍観者を呼び寄せる。

が、瞬間、人ごみの中からこちらを睨む美人転校生とぼつちり目が合った。流した黒髪は今日も美しいぜ、『無表情美人』白根葵なんて余計な事を考えても脳裏に焼きついた映像が消える事はない。

もう出血していないところから見て、血が流れ始めてからずいぶん経ったのだろう、赤黒い絨毯が敷かれた裏庭の芝生の上に、見知った顔がごろりと転がっているのは、残念だがオレにとっては衝撃的過ぎた。

体は伏せっているのに顔だけは上を向いている。絶対的切断面をオレの方に向けて。

昼休みになると、生徒達が弁当を広げる事が多い芝生のこの場所が、普段と全く違う場所のようだった。

慌てて走ってきた教師が大きな白い布をかけたがもう遅い。

携帯端末で上の階の窓から乗り出してから撮影しているヤツさえいたのだ、その神経は全く理解できないが、これだけの生徒が集まってしまつては隠蔽など不可能だろう。

萩原さんが、ここで首を切られて死んでいた。

アア、気持ち悪い。

脳髓と胸中がぐるぐると渦巻いている。

なんだこれ、気持ち悪いってこんな酷い感覚だったか？

クラスメイトのあの姿を目撃したという現実を拒否した思考が麻痺したように動かない。

何だよ、いったい何なんだよ。

何が、どうして、どうなって、ああして、彼女は、萩原は、昨日まで、教室で、笑って、よかったねって、笑って、教室で、どうして、今は、朝は、斬られて、血が、流れて、止まって、広がって、笑って、笑って、あの目で、アノ目で、アノ顔、デ、アノ目アノ顔アノアノアノ……

音が遠ざかっていった。喧騒は、フィルター挟んだ向こう側。

「……さ、だ……ぶ？」

隣にいる筈の夙夜の言葉も聞こえないほどオレは完全に理性を吹っ飛ばしていた。

複数名の女子生徒のように、貧血でぶっ倒れるってことだけは免れたが、オレはあの瞬間、完全に世界を放棄していたと思う。

やけに心臓の音が耳元で響いていたのだけ覚えている。

オレの意識がようやく正常に回転し始めた時、目の前にはいつものようにノーテンキな男の顔があった。

「……夙夜」

「あ、やっと帰ってきた」

にこり、と笑う夙夜。

小さな丸いテーブル挟んだ向こう側、目の前には冷めてしまったコーヒー、右手には大量の花　花？

はっとして周囲を見渡すと、そこは花の王国だった。

ああ、ちよつと言い方が陳腐だったな。

美術の苦手なオレがおおよそ知っているであろう色の名前をすべて並べても足りないだろう、見た事もないほどの種類の花がガラスケースを埋めていた。

それだけではない、鉢植え、バケツ、棚の上まで、至る所が花、花、花。

花の名前に明るくないオレがこの光景を言葉にするのは非常に難しいが、重そうな頭をもたげたユリや大きく広がったカスミソウくらいは認識できた。あと、ちっさいひまわりと、赤いバラ。

天井や壁・床は木目を基調にしたシンプルなもので、時折手描きと思われる花のネームプレートが飾ってあるのが微笑ましい。

さて、こういった類の光景は過去見た記憶がないのだが。

「……どこだ、ここ？」

「あつ、マモルちゃん、やっとお目覚めなのですねっ」

……この声。

振り返るまでもなかったが、とりあえず振り返る。

すると、そこには花の精がいた

「先輩、何ですか、その格好」

「これですか？ これはアルバイトのユニフォームなんですっ。マモルちゃん、かわいいと思ったら褒めていいのですよ？」

そうだな、花の精というよりは『花の国のアリス』とでもいったところか。

ふわふわと広がるのは、確かエプロンドレスとか呼ばれる類のものだ。淡い桃色をしたそれは、掛け値なしに小柄な先輩にとてもよく似合っていた。くるりと回るたびにレースがふわりと広がり、髪をまとめたすみれ色のリボンが風に踊る。

髪に差した紫の花は、もしかするとスミレなのかもしれない。

何より、レースをふんだんにあしらった白いニーソがモロ、オレの好みだ。

よし、認めよう。かわいい。

「ええ、可愛いです」

不本意だが、心の底からの本音だ。

それを聞いた先輩は嬉しそうに笑った。

「ここは桜崎通りからひとつ路地に入ったところにある花屋さんなのです。きつとマモルちゃんは覚えてないと思うのですが、ワタシは今日からここで働くのですっ」

ああ、それでアルバイトの制服。先輩は、高校卒業して花嫁修業なのです、とか言ってたから 要するに体のいいフリーターなのだが これもその一環なのかもしれない。

が、それにしても、本当に可愛い。見た目だけならオレの好みの粋を極めたと言ってもいい……そこ、ロリコンとか言うな。

よし、とりあえずよくやった、まだ見ぬ花屋の店長！

ひそかにガッツポーズ。

「だが、何でオレがこんな所に……」

と、自分で言いながら思い出してしまった。

フラッシュバック。

脳裏に焼きついた光景が目の前に蘇る。

クラスメイト。教室。赤黒い絨毯。切断面。悲鳴。笑顔。顔。死体。顔。『才女』萩原加奈子

うつ、と口元を押さえたオレの背を、先輩がさすってくれた。

「マモルちゃんが大変な事になってたから、シुकヤくんがここに連れてきたのです。ここは小さな喫茶にもなっていますですから、休むといいのです」

「……ありがとうございます」

いったいどれほどの時間、放心したオレの向かいに夙夜が座っていたのかは知れないが、目の前にあったカップの中のコーヒ―は完全に冷え切っていた。

気を落ちつけるように一口ずつ胃に流し込んで、一息つく。

目の前の惨殺死体は消えなかったが、それでもようやくオレの理性が手元に戻ってきた。

「いったい、何だってんだ」

どうして萩原があんな事に。

特に夙夜に向かって呟いたつもりはないのだが、新しくコーヒ―を淹れに行ってしまった先輩を除けば、オレの独り言を聞くのは一人しか残っていないかった。

「んと、警察の人と先生の話だと、生徒が登校する前、鋭利な刃物でばっさり。失血死だけど、もしかすると直接はショック死かもしれない。物理的に自殺の線はないから、犯人捜索中」

オレの疑問に答えたつもりであろう夙夜は、満足げに自分のコーヒ―を口にした。

が、冷たっ、苦っ、と言ってすぐに止めた。なら飲むな。

それより、今の情報はあからさまに一生徒が持っていていい情報じゃないと思うのだが。のちのち噂としてそういう話を聞く事はあ

るだろうが、現時点では極秘事項のはずだ。

「……それ、どこで聞いた？」

「教室」

「教室でそんな事をべらべらしゃべる教師と警察がいるか。また校舎の反対側の盗み聞きか？」

「盗み聞きじゃないよ。聞こえたんだから」

ああ、そうでした。コイツはそんなヤツでした。

忘れてるわけじゃないのだが、あまりにオレとの感覚が違い過ぎて時々ついていけなくなる。コイツが見た目どおりではおさまらないことは知っているのだが、あまりに見た目とのギャップがでかすぎるのだ。

この同級生が持つ並はずれた視力は、聴力は、空間を超越してしまふ。それはとても便利で、とても厄介だ。オレがそれに気づいたのは偶然で、また誰に話す気もないが、おそらくその能力は人間を逸脱している。並はずれた能力故の無関心、マイペース。

いまここでオレと会話をしている事が奇跡に近い。

再度現実を突きつけられ、頭を抱えたオレと対照的に、夙夜は淡々と続ける。

「あとね、すごく気になる情報が」

「おお、お前が気にするとは珍しいな。とりあえず話してみる」

いったんコイツの事を再認識すれば、もつうろたえる事はない。そう思ったのだが。

「あの切り口、たぶん、やったの、珪素生命体だよ」
シリカ

オレは夙夜の言葉で再び理性とサヨナラせざるを得なかった。

03 : 花屋と無関心のティータイム

たつぷり3分ほど、オレは夙夜の間抜け面を眺めていたんじゃないだろうか。

「マモルさん、今日はずいぶんとのんびり生きてるねえ」

意味が分からなかったわけじゃない、飲みこむまでに時間がかかったただけだ。

「……夙夜、それは、それも警察の話か？」

「ううん、違うよ。オレが見たんだけ」

ああ、そうか。

こっちが焦るほどの天然マイペース男は、尋常ならざる能力の持ち主だ。

オレが理性を失っている間、コイツはその並はずれた能力で以て現場の状況を記憶してしまっただけに違いない。ひよつとすると萩原さんの髪一本一本、飛び散った血の一滴一滴まで……

またフラッシュバックしそうになって、慌てて頭を振る。

新しくコーヒーを運んでくれた先輩も、隣のテーブルから椅子を引っ張って、オレたちと同席した。

「あの切り口を作ったのは、たぶん珪素生命体の爪だよ。あの半端な鋭利さと半端な裂け具合は、磨かれた刃物じゃないと思う」

オレは、熱いコーヒーをもう一口。

舌の先がピリピリする。

「珪素生命体の爪は水晶だから、有機生命体とは強度が違う。軽く振っただけでも、人間なんて簡単に傷つけられると思うよ」

「ふふ、シユクヤくんは相変わらずよく見えていますですね。優秀な探偵さんになれるのですよ」

水晶 硬度7、無色透明、酸化珪素の純結晶体。

タンパク質 ペプチド結合により極めて軟弱、かつ脆弱。炭素ベースの重合体。

切断面、血、切断面。

珪素生命体の爪。^{シリカ}

引き裂いて。傷つけて。^{なぶ} 剥り、裂き、削り、千切り、壊し。^{コラ} 死。

「……頼む、やめてくれ」

奈落の底へ落ちそうになった意識を繋ぎとめ、喘ぐ。

無邪気は残酷、無知は罪、無関心は絶望。

オレは何か間違っているだろうか。心が弱いのだろうか。

「オマエに他意がないのは分かってる。でも、夙夜。オレは……そんな話、まだ聞きたくない」

クラスメイトの死を目の当たりにしたのはつい先ほどの事で、ズキンなんていうなまっちょろい言葉じゃ表現できないようなモノに胸を抉られた。

確かに事実とはいえ、そんな話はまだ、聞きたくない。

「……わかったよ、マモルさん」

少し人間からズレた所にいるコイツに何が分かったのか、オレには分からない。

オレの内の『当たり前』の感情が『当たり前でない』夙夜に伝えるのは、口先道化師を以てしても酷く難解だ。

この混沌。この焦燥。この苛立ちと、怒りにも似た無力。

言葉にするには雑然とし過ぎている。整理するには、脳が麻痺し過ぎている。

ああ、やっぱり今日も調子が悪い。

「マモルちゃん、今日はもう帰るのです。一晩よく寝て、明日もがんばるのです」

そう言うてにこりと笑った先輩は、クラスメイトの死に動じない夙夜の事をどう思っているのだろうか？

オレには、何も分からなくなってきた。

夙夜は首を傾げ、苦いと言ったコーヒーを飲み干して、ふう、と息をついた。

「マモルさん、もう萩原さんに会えないのは、とっても悲しいね」
何故だろう。

淡々と語り、血も死も恐れぬコイツの口から出た『悲しい』という単語が、悲痛なほどに感情を表わしていると思ってしまうのは。だからオレは、そんなコイツを見限る事が出来ないんだろう。

「明日お葬式だよ、一緒に行こう。それで、サヨナラして来よう」
「……ああ」

その時の夙夜はいつもと違って、悲しそうに笑っていた。それでも、笑っていた。

帰ろうかと立ち上がったオレに、先輩は一本の花を差し出す。
白く小さな花びらが集まって、ああそうだ、アレに似ている。小学校の時に花壇で育てたマリーゴールド。鮮やかな橙色をしたアレの花弁から色をぬけば、ちょうどこんな感じになる。

先輩は満面の笑みでそれをオレに押しつけた。

「イベリスという花なのです。かわいいでしょう？ 遊びに来てくれたお礼に、あげるのです」

「ありがとうございます」

受け取ったオレを見上げ、先輩は挑発的に笑う。

「マモルちゃんはいベリスの花言葉、知ってますです？」

「知りません。何ですか？」

尋ねると、先輩は微笑した。

「『無関心』、ですよ」

店を出た夙夜とオレは、桜崎通りをまっすぐ東、駅に向かって歩いていた。オレは自宅が駅のそばだから。夙夜はこれから2駅の所にあるマンションに住んでいるから。

まだ一日は半分しか過ぎていない、真上に太陽を感じながら、駅前の小洒落た店が並ぶ坂の道を、駅に向かって下って行った。

すぐ横を無音で車が駆け抜けていく。10年ほど前からガソリン

自動車を電気自動車に転換したことで交通事故は増える一方だというが、それも頷ける。オレが子供のころは、まだ自動車が凄まじい騒音をたてて走っていた気がする。

前に視線を戻せば、タイルで舗装された歩道にまっすぐに並ぶ黄色のラインが駅に向かって果てしなく続いていた。

「夙夜、オマエ、この視覚障害者用の点字ブロックで足ひねってたよな」

「……一年も前の話なんかしないでよ、マモルさん」

「こんなモンに躓くバカが他にいるか」

くだらない会話、でも、それがいい。

このマイペースな奴には血だとか死だとか、珪素生命体との確執だとかは似合わない。頼むからオマエは、そのまま内に飼っているケモノを眠らせておいてくれ。例え世界の方がオマエを放っておかなくなる日がいつか来るとしても。

「あ、マモルさん。コンビニ寄ってプリン買っている？」

そうそう、激甘党かつプリン魔人のオマエは、そうやって新作コンビニプリンでも食って喜んで……って、ああもう。このギャツプで力抜けるぜ、バカ野郎。

例えそれがオマエの作り上げた興味だとしても。

でも、もちろん、人生そんなに甘くないってのが通説だ。

オレの予感つてのは、極端な能力を持つ夙夜並みじゃないとしても、それなりに当たるのだ。

「あーやべえって。これ、オレの思った通りだって」

思わず口からそんな言葉を漏らすほど。

なにしろコンビニ袋を提げたオレたちの目の前に現れた黒髪美人は、相変わらず表情ないアーモンドの瞳をまっすぐオレと夙夜に向けていたのだから。

始業式も終え、春のポカポカした陽気だというのに、オレの周囲だけツンドラ気候。

助けて、地球温暖化。

「こんにちは、アオイさん」

「……こんにちは」

おお、白根葵が意外と普通の挨拶を返してきたぞ。

それでも、恐ろしく冷えた視線に変化はないが。

無表情美人の彼女は、当たり前のように淡々と告げた。

「私は、あなたたちと、お話をしたいと思っています」

「……は？」

まるで機械のような、意味不明な言語が彼女の口から飛び出して、オレは思わず口を開けて固まってしまった。

やべえよ、これ以上呆けてたら気づかぬうちに一日終わっちゃうよ。

ぶるぶる、と頭を振って、オレは深呼吸。一回、二回。

よし、落ち着いた。

「マモルさん、やつぱり今日はのんびりだねえ」

だいじょうぶ、隣のマイペース男の言葉は聞き流せ。敵（と呼ぶのが適切かどうかは知らないが）は珪素^{シリカ}生命体でなく人間、そして転校生の女の子。

「ええと、白根、だったか、オマエ、オレの事を見たことがあるとか言ってたが、そりゃ本気か？」

「事実です」

よかった、とりあえず会話は成立するようだ。

「あなたは、私が搜索している人物である可能性があります。だから、私はあなたと話がしたいと思います」

いや、これ、成立してるのか？

「ねえ、マモルさん、俺お腹すいたな」

「……」

この野郎、残酷から天然に戻った途端コレか。

目の前にクールビューティ、背後に天然。

オレってやつぱ不幸体質？

04：無表情と無関心のセッション

仕方なく、オレたちは近くのレストランに腰を落ちつけた。フロンチャイズの、学生に優しいお手ごろ価格。高校から近い事もあって、なかなか繁盛している。

きっと今日、突如休校になった事も関係しているだろうが。

向かいの席にはしっとりとした黒髪も美しい無表情美人。うーん、残念ながらオレの好みは美人系じゃなく可愛い系なのだ。

お昼時だというのに、隣の激甘党は迷った拳句にパフェを3つも注文しやがった。

オレは普通にパスタ喰うけどな。

お勧めされていた菜の花とボルチーニの柚子胡椒スパゲティを注文し　ボルチーニ二つてのがいつたい何なのかは分からなかったが

お冷を含んで一息。

さて、本題に入ろうか。

こういった問題は、たいてい先送りにしていい事なんてあまりない。

腹をくくったオレに、ようやくいつもの調子が戻ってきた。ビークール。夙夜のような特殊能力を持たないオレは、焦った時点でジ・エンド。

状況を把握しろ。思考を止めるな。

情報は財産、思考は凶器、言葉は魔法。それらは、マモルちゃん
の唯一最強の武器なのです　そう言ったのは、あの可愛らしい先輩だったか。

「さて、オレとしてはいろいろ言いたい事がある訳なんだが、まずそちらの話を聞こうと思う。後手に回るのは卑怯だとか言うなよ？
そっちが先に吹っかけてきたんだからな」

少々喧嘩腰なのは、クールな相手に対抗するための一つの手段。
それから、無表情美人の迫力にもう負けられないようにするため、自

分にかけて暗示。

受験の年の新学期に、これ以上問題を残しておきたくない。面倒くさいで済むうちに、片づけておきたい。

あ、オレ今年受験生か。自分で言って凹んだ……ではなく。

「まず、オレはオマエの事を白根と呼ぶが、それはいいか？」

「構いません」

「じゃあ、白根。とりあえず、オマエが誰かを探している事は分かった。オレは、その誰かに似ているのか？」

「似ています」

「その、オレに似たヤツつてのは、いったいどこで、どういう状況で見たんだ？」

「それは言えません。秘則です」

ヒソク？ 秘則。

秘密の規則。又は、秘密にするという規則。

ここでは後者だろう。

秘則。規則。法則。

そこには、確実に『規則を定めるモノ』が必要なはずだ。

コイツは個人でオレを、もしくはオレに似た誰かを探しているのではなく、誰かに命令されて搜索を行うという事を裏に秘めていると見て間違いないだろう。

困ったな、これはどうやら思っていたよりずっとオオゴトらしい。最初に問題なのは、白根の言う事が『妄想』なのか『真実』なのか、だ。この手の話しぶりで、よく虚言を吐くヤツをオレはよく知っている。

だいたい、突然現れた転校生がオレを探していて、しかもそのバツクには何らかの組織が……なんて、ベタにベタの上塗りだろう？ 話半分に聞いて、これからの対策を適当に立てておくのが正解だ。オレはただの平凡な男子高校生。『名前だけ主人公』と称されたからには、そんなドラマチックな展開が待っているとは思わない。「すまん、質問の順番を間違えた。オマエは、なぜソイツを探して

いる？」

「それが現在の私にとって至上命題だからです」

何の答にもなっていないが……やはりそうだ。

この転校生の上には、命令を下す何かが存在する事を示唆している。そしておそらく白根は、どう聞いてもこの上部組織については口を割らないだろう事は直感的に理解する。

白根の虚言であるという可能性も含めて。

とりあえず、なぜバックによく分からない組織を持つ白根がオレを探しているのかという非日常的な事実はさておき、ここまでくると一番重要なのは、オレに対して害意があるかどうかだ。

「じゃあ、オレをその……探しているヤツだと断定するには、いったいどうするんだ？」

「分かりません。搜索命令に当たって私に与えられた情報は少なく、断定するには不十分です」

どういう事だよ。

「いったいどうやってオレを判別するんだよ」

「監視します」

「……じゃあ、もし仮にその探してる相手がもしオレだった場合、オマエはどうするんだ？」

「監視します」

白根、即答。

監視とはまたよく分からない答えだ。

ある意味で捕縛に近く、ある意味で放置に近い。

「オレを傷つける予定は？」

「ありません」

「オレの生活を邪魔する事は？」

「ないように配慮します」

配慮、ねえ。

ここまでの白根の話が本当だと仮定したとしても、上からの命令がない限りコイツがオレに牙をむく事はないだろう。

虚言ならば、少々おつかない美人ストーカーだ。

「まさか、オマエが転校してきたのは、その誰かを探すためか？」

「そうとも言えますが、違うとも言えます」

曖昧な答えだな。

「私は常に移動します。先ほど言った搜索対象を見つけるのが私の至上命題ですが、他にも多くの命題を持ち、様々な場所を訪れるのです」

「……」

何者だ、コイツは。

究極の妄想女か、本物のヤバイ世界の人間か、二つに一つ。

隣に座っているマイペースには分かるかもしれないが、オレには判断できない。ちなみにそのマイペースはすでにチョコパフェを食べ終え、期間限定スプリングサクラパフェにスプーンを突っこんだところだった。

それにしてもちくしょう、全部オレの問題とはいえ、ちょっとは参加しやがれ。

泣きごとを言っても仕方がない。オレは再び白根の方に視線を戻した。一つ、ため息。

「一応聞くが、オマエ……何者だ？」

「私は白根葵です。以前にも申し上げた筈ですが？」

「名前を聞いてんじゃねえ。親は？ 兄弟は？ 今はどこに住んでいる？」

「親は、生物学的な意味での親は、現在の居場所は不明です。兄弟はいるかもしれませんが私にはわかりません。現在は、桜崎駅付近のマンションで一人暮らしです」

すらすらと答える白根だが、もう怪しさ全開だ。

よし、決めた！

オレはコイツと関わらねえ！

「一人暮らしなんだ、俺と一緒にだね」

二つ向こうの駅近くのマンションで絶賛一人暮らし中の夙夜がな

ぜかここで参加。

もうコイツの興味の方向が分かんねえ。もう3年目の付き合いだというのに、コイツの趣味嗜好も考え方も生き様も、何も見えてこない。

「そうですか。ところで、私はあなたたちの名前が知りたいのですが」

やっべ、白根も夙夜に負けず劣らずの天然じゃないのか。
今更オレたちの名前とか、完全にタイミング間違ってねえ？

待て待て待て、『口先道化師』レベル1のオレごときで、この天然爆弾を二人も養えるのか？

「俺は香城夙夜^{こうじょうしゅくや}。こっちはマモルさん。よろしくね、アオイさん」
「では、改めてよろしくお願いします」

無表情に向けられた邪気のない笑顔。

『無関心』の気まぐれな興味は、たまたまオレに寄って来た、転校生に向けられた。

夙夜は笑う。怒りはしないが困った顔もするし、表情豊かだ。問答無用の天然素材、クラスメイトの受けもいい。運動部でもないくせに運動神経はよくて、さらに言う成績もそこそこ。

でも、違う。

とんでもなく目がよくて、とんでもなく耳がいいコイツは、オレたちからは想像もつかないような情報の渦中で生きている。

今だって、この店の中にいる人間と、前を通る人間の会話をすべて耳に挟み、さっき先輩の店に並んでいた花の種類から数まですべてを記憶してしまっていることだろう。もちろん、オレの一瞬一瞬の表情すらコイツの脳内に刻まれているはずだ。

その中で生きるコイツには、特別なモノが出来ない。とんでもなく目のいいコイツにとっては、目の前のクラスメイトも地面を歩く虫も、同じように見えてしまうから。

だから、特別なモノを意識的に作る。

人間から逸脱しないように。周囲の人間を観察して、真似をする

事で人間であろうとする。

自分から興味を持つ対象が例えば、甘い物だったり、時に意地っ張りなキツネだったりする。今回の場合は、たまたま面白そうな転校生。

隣にいるオレに対しては本当に興味があるのかと聞いてみたいが、その答えは恐ろしくて聞けない。

「では、私から質問してもいいですか？」

転校生のアーモンド型の瞳がオレを射抜く。

「……質問内容によってはな」

「感謝します」

白根は、深々と礼をした後、まっすぐにオレを見て言った。

「私が持つもう一つの命題の為に、あなたたちの協力を要請します」
「いいよ」

つて、即答すんな、このマイペース野郎！

いまオレはこの転校生と関わるのはよそうと、心の底から決意したところなんだよ！

「感謝します」

白根は艶やかな黒髪を揺らし、軽く会釈した。
ねえ、まさか、ほんとにオレって不幸体質？

05 : 道化師と無関心の「ラレーション」

会話の間もずっとパフェを頬張っていた夙夜は、全部食べ終わると、行儀よく手を合わせた。

「ごちそうさま…… やっぱ季節限定は食べなくなるけど、実際食べるとあんまりよくないね」

そんなこと聞いてねえよ。

てかスプリングサクラパフェとかいうセンスゼロの名前を見た時点で分かるだろうが。

まあ、ちなみにオススメの菜の花とボルチーニの柚子胡椒スパゲティはうまかった。やっぱり命名はストレートなのが一番だ。結局ボルチーニが何なのかは分からなかったがな。

「じゃあ、アオイさんって、マモルさんを探すのとは別にいくつもやんなきゃいけない事があるんだねえ」

「私に課せられた命題は現在、優先順位で以て分別されます。まず第一命題が、ある人物の搜索」

「うん、それがマモルさんに似てるんだよね」

「そうです。あなたたちの協力を要請したのは、第二命題です」

「それって、オレたちにも出来る事なのかな？」

「あなたたちだからこそ出来ます」

断言した白根は、さらにと黒髪をかきあげた。

「あなたたちは一年前まで一つの珪素生命体シリカと行動を共にしていたとお聞きしましたが、それは事実ですか？」

「うん」

「正直に答えるんじゃない、このバカ」

ああ、オレはこのまま何処へ行く。

「では、私の第二命題を告げます」

アーモンドの瞳がオレを射抜いた。

「私の第二命題は、珪素生命体シリカを見つけ出す事です」

「……?!」

思わぬその言葉に、オレは思わず声を失った。

珪素^{シリカ}生命体。

彼らが定義されたのは今から102年前。山奥で初めて発見された、銃もきかず、刃も通らないという不可思議な生命体だった。

世紀の発見。

調査に次ぐ調査。

そして有機^{タンソ}生命体のニンゲンたちは、ようやく真実にたどりついた。

それらは、自分たちと同じ有機^{タンソ}生命体の手によって創られたモノだった。千木良晴良^{ちぎりはるよし}生物学博士 彼が、たった一人で数万体とも言われる珪素^{シリカ}生命体を創り上げたのだった。

炭素ではなく珪素をベースとして組まれた分子で構成される珪素^{シリカ}生命体の毛は柔らかそうに見えても金属であり、爪は水晶、瞳は寶石とほぼ同一だ。

生殖能力を持たない珪素^{シリカ}生命体は、しかし朽ちない。石と同じ素材でできているから。

彼らが消えるのは、死のプログラム『マイクロヴァース^{カラダ}』が発動した時だけ。マイクロヴァースは珪素^{シリカ}生命体の^{カラダ}分子レベルに分解し、無に帰す。

死体は残らない。活動を停止した彼らに待つのは、本当の無だ。その存在に意味はなく、その活動に定義はなく、その生命に目的はない。

ただ在るだけのイキモノ。ただ、淘汰の先に朽ちるのを待つだけのイキモノ。

それが珪素^{シリカ}生命体。

珪素生命体という言葉が出てきたせいだろうか、夙夜はそこで口を開くのをやめ、少し困った顔をした。

もちろんオレも混乱している。

珪素生命体シリカを探す？ 何のため？

一般的に考えれば、愛玩動物として売り払うための捕獲。

好意的に考えれば、山奥へ逃がすための保護。

他の理由としては、先ほどの事件と関係してくる クラスメイ

トの萩原は、珪素生命体シリカの爪で裂かれて殺された。夙夜の言う事だから、9割9分9厘間違いない。こいつは、分かってて口を閉ざす事はあるが、絶対に嘘はつかない。

「白根、オマエは何のために珪素生命体シリカを探しているんだ？」

「それが私の命題であるからです」

ああ、ちくしょう、しまった。

「じゃあ質問を変える。オマエは、仮に珪素生命体シリカを見つけたらどうする気だ？」

「保護します」

「保護つて、アイツら野生生物だぞ？ そう簡単に捕まるわけ」

「抵抗した場合、戦闘を許可されています」

「……！」

これは、妄想か？

それとも、本気か？

この無表情の奥に潜むのは、どういった種類の感情だ？

夙夜は、ようやくここで口を開いた。

「じゃあ、抵抗しなかったら傷つけたりしないんだね」

「はい。もともと珪素生命体シリカを傷つける事は奨励されていません。そもそも、法に抵触する行為です」

「分かった」

夙夜は、ただ頷いた。

「ありがとうございます。ご協力、感謝します」

黒髪を流して深く礼をした白根の本意が見えない。

本気？ 虚言？ 半分？ すべて？ どこまで？ 全く？
何を信じる……？

オレはどうすべきだ。考えろ、考えろ、思考を止めるな、最も妥当な答えを選びだせ。

「怖い顔しないで、マモルさん」

夙夜の声ではっとした。

「大丈夫だから」

なんて、ノーテンキな言葉。

なんて、ノーテンキな声。

なんて、ノーテンキな笑顔。

それを聞いて、オレの中に余裕が戻ってくるのがわかる。さつきまでぎりぎり追い詰められ詰め込まれていた意識が、解き放たれる。ああもう、考えてるのもバカらしい。

言葉は魔法 ほんとですね、先輩。

だからオレは、コイツの傍を離れられないのかもしれない。

「さんきゅ、夙夜」

ぼん、と隣のヤツの肩を叩いて。

「仕方がない、男に二言はないと昔から言うから、オレはオマエに力を貸す。が、勘違いするな、オレは積極的に関わる気はねえ……コイツはどうするのか知らねえが」

「俺はどうしようかな」

いや、オマエが協力するって言ったんだからな。

「白根、だから今すぐオレたちがすべき活動内容を簡潔に述べろ……それなら得意だろ？」

「了解しました」

オマエは機械か、聞いてみたい。

まるで感情を持たない作業機械のような口調は、珪素生命体よりずっと人間から遠い位置にあるようだ。

「あなたたちは、ただ、少し気を付けていただければいいのです。」

珪素生命体の姿がないか、痕跡はないか、ほんの少し気を付けてい

てください。もし発見したなら、私に報告していただきたいのです」
「それだけでいいのか？」

「はい。あなたたちは以前、珪素生命体シリカと接触しています。先ほどあなたがおっしゃったように、彼らとの接触はそう容易ではありません。おそらく、あなたたちは適合者コンフイ」

「コンフイ？」

「珪素生命体シリカとのコミュニケーションを苦なく行う素質を持った者を私たちはそう呼んでいます」

「……」

やべえ、やっぱり白根の相手するのはすつごく嫌かも。
どこまでイってるんだ。この転校生。

「……まあ、いいだろう」

いちいち突っ込んでたら始まらねえし、終わらねえ。
深刻にとらえても仕方ねえし、考えたってワカラネエ。

「ご協力、感謝します」

そう言った白根は唇の端をあげて 微笑した。

コイツの笑顔なんて初めて見たんじゃないの？

笑顔ってほどのもんじゃないけど。

なかなか笑わねえのはあの銀色の意地っ張りキツネと同じかよ、
くだらねえ。ヤマザクラの花言葉が『あなたに微笑む』だと言った
のは、隣に座ったマイペース野郎だったか？

「じゃ、話はこれで終わりだな」

ちくしょう、いろんなことを思い出しちまったじゃねえか。

イライラする。

目の前のコップの水を全部飲みほして、勘定をひったくろうとした瞬間、凄まじい速度で横から手が伸びてきた。

「ありがとうございます。コレ、は、私の話を聞いて下さったお礼です」

勘定を奪い取った白根は、有無を言わさぬ口調で言い切った。

憤然と煮え切らない感情を抱えて店を出た。

昼、少し過ぎ。日が落ちるまではまだ間がある。平日にしては高校生の姿が多すぎるストリート。楽しそうに買い物をする同級生たち。

この平和な光景は、萩原の死で与えられたモノ。

ああ、イライラする。

「なあ、夙夜。本当に、この街に珪素生命体シリカがいるのか？」
「いるよ」

一瞬の躊躇もなく即答した夙夜は、全く悪びれた様子がない。
ああ、当たり前すぎてイライラする。

「いつから？」

「んー、半月前くらいかな？」

半月前。

卒業式。

サクラの下、銀色の毛並み。

そうか、あれは見間違いないかったのか。

下る。

永久に続くかのような騒がしい坂を、駅に向かって下って行く。

「夙夜、オマエはどう思うんだ？」

「何が？」

何がだろうな。

萩原の事？ 珪素生命体シリカのこと？ 事件の真相？ それとも白根の事？

分からない。何かが複雑に絡んでいる気がする。

夙夜の言う事に嘘はない。きっと、萩原を殺したのは水晶の爪で、また、梨鈴以外の珪素生命体シリカがこの街にはいるのだらう。

その因果関係を口に出す事などあり得ないし、梨鈴を知るオレはそうあるはずがないと思っている。

では、白根は何のために探している？ オレの話は置いておくとして、なぜ水晶の爪を持つモノを追う？

「じゃあ聞くが、白根の言う事は真実か？」

「うん、嘘は、言っていない」

「そうか」

もしかするとオレは、いろいろな事を覚悟した方がいい。

白根の言う事がマジですべて真実だった場合、たぶんオレみたいな平凡な高校生には対応もしきれないようなコトが待っている。

もう、今日は帰って寝る事にしよう。

オレは固く心に誓って、駅への道をさらに足を速めて下って行った。

06 : 道化師による幕間モノローグ

揺らめいて、煌めいて、銀色で、ふわふわと、最後に笑って。
それでも、オレには何も出来なかった。

なあ、夙夜。

オマエに見える世界がオレにも見えていたら、アイツを救えたかな？

真つ暗な部屋の中でベッドに横たわり、オレは暗闇を見つめていた。

先輩にもらったイベリスの花が、じんわりと発光しているかのよう
に闇に浮かび上がっている。

今でも目の前に投影されているのは血に濡れたクラスメイトの姿
だった。眠れば忘れるものではないし、それ以前に……眠れない。
けれども、多くの事が一日のうちに在り過ぎたせいか、意識が分
散して、萩原の死で決られた傷がほんの少しだけ薄れていた。

代わりに、多すぎる出来事がオレの脳内を支配して……眠れない。
水晶の爪で、喉を裂かれて死んだ『才女』萩原加奈子。

再び街に現れた珪素生命体。

転校生、白根葵の探し人。

オレにはまだ分からない。

いや、普通なら簡単だ。珪素生命体が萩原を殺した キユー・イー・デー 証明終了。

しかし、他の珪素生命体を知るオレにはどうしても信じられない。
彼らが人を傷つけるとは思えないのだ。

これは感情的な問題。そして、理論的な問題。

珪素生命体には、人を傷つける理由がない。

解決しないシーソー論理、もう一個なにか証拠があればどちらか

に傾くと言つのに、オレの中にはもう一つのピースが足りない。

足りない。

足りない。

教えてくれと誰かに頼む事は簡単だが、難解だ。

誰に聞く？ 何と聞く？

何よりオレは、夙夜以外の人間に何かを問う事を嫌悪している。

最期の笑顔と絶対的切断面が、目の前をちらついて離れない。

闇に目を凝らす。

幻影は消えない。

笑顔が消えない。

惨劇が消えない。

疑問が消えない。

ああ、気持ち悪い。

何もかもを無に帰すマイクロヴァース。

シリカ珪素生命体を最初に創った博士の意図は知れない。何しろ、世間一般的に彼らの存在が明らかになったとき、すでに博士は故人だったから。一人で数万体のイキモノを作り上げた博士は、誰にも胸中を語る事無くこの世を去った。

『異属』を見つけたら消せ、というたった一つの命令を彼らに与え、他には何の制約もなく、何百年も朽ちる事無い^{カラダ}軀と人間を模した思考を持ったイキモノとして形作った。

彼らはただ存在し、『異属』を見つけては排除し、緩やかな時の中で淘汰していく。

なぜ排除の命令を与えたのか。

博士はマイクロヴァースというプログラムにどんな願いを込めたのか。

その先に在るのが永遠なのか、それとも消滅なのか。

オレも、死ぬ時は何も残さずに消えたいよ。

もうダメだ。こんな気分で寝られるわけがねえ。

オレは、とうとうベッドから起き上がり、寝巻用のスウェットにフードパーカーをはおると、夜中のコンビニまで散歩する事にした。

隣の部屋で寝ている大学生の姉も、下の階で寝ている両親も

疲労困憊で家に辿り着いたオレに対して、察して何も言わなかった家族。

誰一人起こさないようにしながら、そつと家を出た。

何もかもを、忘れたかった。

それでもモノガタリはオレの周囲を巻き込んで いや、正確に言うならば、オレは最初から関わってない。うまいことオレを巻き込まず、周囲だけで起きていた。オレの周囲の日常は、常日頃から非日常の体現なのだ。

事件の中心にいながらにして完全なる部外者であったオレは、裏腹に、現実が一番近かった。

行きつく先は、終焉、奈落、流浪に流転、変幻自在と都合主義と、自我の塊の集^{カタマリアツメル}で。

一気に収束していく結末に、オレなんかが、一介の『口先道化師』が入り込む隙なんてどこにもなかった。

オレは傍観者で、名前だけ主人公の部外者。

何故かオレの周囲に集まる、人並み外れた有機生命体^{タン}のニンゲンを見守るだけ。

『絶対的切断面』

『水晶の爪』

『無表情美人』

『名付け親』

『無関心の災厄』

これだけ役者がそろえば十分だろう。

幕間劇は終了で、ここから本番、見逃すなかれ。

リストにオレの名前は入れないでくれよ。

何しろオレは口先道化師、見守ることしかできないのさ。

07 : 真夜中のネコと水晶の爪

冬は終わったとはいえ、スウェットにパーカーで出てきたのはちつとばかりまづかったか。冬と違って刺すような寒さはないが、春先の夜風はぶるりと震えるほどにひんやり冷たい。

パーカーのポケットに手をつ込むと、忘れていたしわくちやの1000円札が出てきてラッキーな気分を味わえた。

これだけでも、寒い中出てきたかいがあるってもんだ　オレってばなんて小市民。

車も走らぬ午前、片側一車線の歩道もない道をLEDの街頭頼りに駆け足でコンビニへ向かう。

人が少ないのは、桜崎高校で起きた事件がようやく街全体に浸透したせいだろう。

高校の生徒が喉をかつ切られて殺された。

それだけで、外出しない理由としては十分だ。

夙夜が一発で見抜いた珪素生命体シリカがどうの、水晶の爪がどうのって事に、警察もそろそろ気づいているはずだが、いったいどういった対応をするのか、オレには見当もつかなかった。

そして、明日からの自分がいったいどうしていくのかも、見当がつかなかった。

まあ、当面の予定としちゃ、コンビニに到着してまず肉まんだな。それから、始業式と同時に発売だったはずの、読み損ねた雑誌にでも一通り目を通すか。

「あーさぶっ」

順調な行程ならば、コンビニまで10分ほどだったはずだ。

しかしながら、オレはどうしても不幸体質らしい。

「……不良少年か？」

道の反対側、街灯の傍に、小さな人影を見つけてオレは思わず足を停めた。

別に何を注意する気もないが、この寒い中あんな事件があったあと、こんな所に一人とは、怪しむ理由に事欠かない　まあ、それはオレにも言えることなのだが。

が、次の瞬間、灯^{アカリ}を反射した銀色に、オレは愕然とした。

銀色の毛並みの尻尾がゆあんと揺れる。そして銀色の髪から飛び出た銀色の耳。

そこに立っていたのは、まぎれもない珪素生命体^{シリカ}だ。

待て待て待て、今回の事件に珪素生命体^{シリカ}が関わってるかもしれないと言ったのは夙夜で、ソイツを探していたのは白根だ。関係ないオレの目の前にその張本人らしきイキモノがいるのはいったいどういう了見だ？

と、という言葉を飲み込んで、ついでに固唾も飲み込んで、オレは薄ぼんやりとした街灯の下に佇む人影を凝視した。

「……有機生命体^{タンシ}」

ガラスを弾いた様な澄んだ声^{シリカ}が珪素生命体の喉から漏れた。

見た目はフツウの少年、14・5歳といったところ。フツウじゃないのは、見事な銀色の髪と、その髪から覗く銀色の耳、そして古典的和服の尻のあたりから銀色の長い尾が生えているところ。

あれは、ネコ少年だ。

保護対象である珪素生命体^{シリカ}が愛玩用に捕獲されて問題になるのも納得、サファイアのように美しい蒼の瞳^{いぶかし}が、訝むようにオレを貫いていた。

ネコ少年に関しては特別な思い出があるのだが、思い出したい事ではない。

「有機生命体^{タンシ}だ」

笑わないのは彼らの標準装備なのだろうか　そう言う意味では、白根はニンゲンより彼らに近いのかもしれない。

「この時間なら、ダイジョウブだと思ったのに」
逃げない。

この珪素生命体^{シリカ}は、人間を恐れていない。

「しかも、キミはボクを見て逃げない」

いや、こう見えてオレは、心の中で猛ダッシュしてここから逃げてるからね。

夙夜ーっ、助けてくれーっ！

が、銀の毛並みの彼らを扱う事に長けたアイツは、この場にいない。

オレしかない。

ちくしょう、どうしたらいいんだ　と、足りない頭をフル回転させた拳句、オレはこの珪素生命体^{シリカ}との繋がりを保つことにした。切れてしまった縁は戻らなくなる可能性が高いので、オレが頑張るしかないだろう。

「やあ、こんにちは、珪素生命体^{シリカ}の少年」

まるでそのへんの野良猫にするように、手を差し伸べてみる。

デジャ・ヴ。

唐突な既視感に襲われたオレは、記憶の底を探り、その答えを手に入れた。

ああ、そうか。

これは2年前、オレたちが最初に邂逅した珪素生命体^{シリカ}、キツネ少女との出逢いと同じ。彼女の時、夙夜はこうやって最初に手を差し伸べたのだ。まるで、敵意がないことを示すかのように。

自然と同じ行動をしている自分を不思議に思いながらも、ネコ少年の耳がぴくんと動いたのを見逃さなかった。

オレに興味が向いた。

「こんにちは、有機生命体^{タンソ}のお兄さん」

尻尾がゆらゆらと左右に揺れている。

酔いそうなりズムが、街灯を反射した。

「オマエ、逃げないのか？」

「それはこっちの台詞だよ、お兄さん」

生意気そうな口調も彼らの標準装備か？

オレは一步ずつ、ネコ少年に近づいていった。

足が少し震える　もし萩原のように一瞬で喉を裂かれて死ぬのなら、それもいい。

「以前にオマエと似たような知り合いがいてな、馴れてんだ」^{マエ}

そう言つと、ネコ少年は首を傾げた。

「それつて、ボクの『異属』？」

「ああ、そうだ。もういないけどな。一年前に別の『異属』と闘つて、消えた」

「ふうん、そう。でも、もう一人いるよね、ここ、『異属』。昨日、会つたし」

「?!」

もう一人?!

このネコ少年以外にも、この街にまだ珪素生命体^{シリカ}がいるのか?!

「へんな場所だね。あんまり有機生命体^{タンパク}の近くにくる予定はなかったんだけど、気がついたらここに来ちゃつてた。まるで、何かが呼んでたみたいだ」

「そうだな、オレもそれは不思議だと思つぜ」

「本当だよな。ボクもそれが不思議なんだよ」

何の変哲もないこの街に、この短期間で珪素生命体^{シリカ}が3体、もしかすると4体。

これが異常事態だつてことは、警察でも探偵でも研究者でも何でもないオレにだつて分かる。

「なあ、オマエ……名前はあるか？」

「名前？」

やっぱりか。

このまま別れてしまえば、オレとコイツのつながりが切れる。

白根に知らせるかどうかはまた別問題として、手札はすべて手に残しておくもんだ。

だから、次に会う約束を取り付ける。

「名前、つけてやるよ」

「ホント？」

ぴん、としつぽが立つ。

やっぱり、分かりやすい。

梨鈴も名前を喜び、はしゃいだのを覚えている。

「ただ、オレは名前を付けるのに向いてないからな。名前を付けるのが得意なオレの友達と会わせてやるよ」

「やった！」

尻尾と耳が感情を表す。顔は笑っていなくても、コイツらの感情はすぐ分かる。

「ボク、山にいるから。あんまり明るい所に降りるのは危ないから、待つてる」

「ああ、じゃあ、ヤマザクラ、分かるか？」

「うん、わかるよ」

「そこで待つてろ」

「わかった！」

ぴょん、と飛び上がったネコ少年は、すぐそのブロック塀に飛び乗った。

一跳びでこれだ、珪素生命体シリカの運動能力は言わずとも理解できよう。

「待つてるよ！」

四足で塀に登り、尻尾を振って。

ほら、きつとコイツは人間を傷つけたりなんかしない。

心の片隅に安堵を覚え、オレも塀に向かってひらひらと手を振った時だった。

尻尾を振りながら塀の上を歩いていたネコ少年が、ふいにこちらを睨みつけた。

「?!」

えっ、何、ここで突然の攻撃スイッチオン?!

「『異属』」

そう呟いたネコは、暗闇にその身を躍らせた。

動けないでいるオレを軽々飛び越え、その後ろの影に飛びかかっていったのだ。

きいん、と背後で金属音。

ヤバイ。

振り向けばきつと珪素生命体^{シリカ}同士の戦いが勃発しているところだろっ。

銀色の毛並みが二つ、ぶつかっては離れ、互いを互いで傷つけていく一年前の光景がありありと蘇って、オレは総毛だった。

「やめ
」

やめろ、と言おうとしたオレの言葉は、最後まで続かなかった。

何しろ、振り向いたオレの目に飛び込んできたのは 水晶の爪を振りかざして闘うネコ少年と、転校してきた黒髪の美女だったのだから。

08：無力な道化師のリソリューション

一悪魔の証明《probatio diabolica》、なんて言葉がオレの脳裏を過ぎる。

この時点を持って、一連の事件は完全にオレの理解の範疇を超えた。

どう見ても有機生命体^{タンソ}に見える白根と、どう見ても珪素生命体^{シリカ}に見える少年。

なぜ二人が闘っている？

ネコ少年が先ほと言った、『異属』は白根の事なのか？

だとすると、白根は人間ではないのか？

いたい

キン、と甲高い金属音がして、ネコ少年の尾が傷ついた。

白根が持つのは、珪素生命体^{シリカ}が持つと同じ、『水晶の爪』。

血の滴らぬ傷口に、一年前の記憶が蘇る。

ヤマザクラ、キツネ、髪、『異属』、笑顔。

笑顔

また、オレには何も出来ないのか……？

「……めろ」

ふつふつと沸き上がる何か。

それは、沸騰石なしの実験のように、次の瞬間突沸した。

「やめろ！ ソレは『異属』なんかじゃねえ！」

オレの大声で、びくりとするネコ。

サファイアのような蒼がオレをみた。硝子玉のように感情ない、美しい瞳。

「やめろ」

オレの言葉で、ネコは一步一步と後ずさりし、そして、何も言わずに夜の闇へと身をひるがえして去っていった。

ああ、やっちゃった。

アイツは明日、ヤマザクラの元に来てくれるだろうか？

先輩と夙夜に会わせてやる事はできるだろうか？

もっ少しだけ、アイツとの縁を繋ぎ止める事は可能だろうか。

「困りました」

白根の声が背後から響いた。

ホンモノ 眞実の人間は、なぜか水晶の爪を持ち、この場に現れ、ホンモノ 眞実の珪素生命体の少年を混乱させた。

でもコイツは、『異属』なんかじゃない。

「あなたに協力を要請する際、私の行動を妨げない事を了承していただくのを忘れていました」

ゆっくりと振り向いたオレの目に、街灯の下、制服のまま佇む白根の姿が目に入る。

オレと同じ制服、見慣れた桜崎高校の女子ブレザーが、全く別世界の召し物に見えた。

しかしながら、白根の指に装着されている武器はオレにも見覚えがある。

あれは、シリカ 珪素生命体だけが持つ筈の『水晶の爪』。

LEDの街灯に照らされて、プリズムのようにきらきらと輝いていた。

どくん、と心臓の鼓動一つ。

喉を裂かれた萩原の顔が想起する。

「どうやら、あなたは違ったようです。それが今、分かりました。

あなたは私の探すモノではなく、強い極性をもつ適合者^{コンプライ}」

静まり返った夜の坂道に響く、透明な声の主は白根だ。

「……は？」

何だ？ 白根はいつたい何を言っている？

オマエは珪素生命体^{シリカ}を保護するんじゃないかったのか？ なぜ、オ

マエは何の躊躇もなくアイツに武器を向けた？

「さて、白根。それより、オマエのその『爪』は」

「これは、私に与えられた武器です。珪素生命体^{シリカ}との戦闘を考慮し、

与えられたものです」

珪素生命体と同じ武器を与えられた　オレは、その瞬間観念した。

オレの勘によると、残念ながら、白根の言葉はすべて本気だったらしい。おそらく、その後ろには何かしらのボスが控えている。

新規生命体関係、おそらく違法ぎりぎり、戦闘も辞さない物騒な集団。

この白根の洗脳っぷりから見ると、頭の方も相当キレるらしい。恐怖が膨れ上がる。

水晶の爪を納めた白根は、オレに向かって頭を下げた。

「ここまで巻き込んでしまったのは私の責任です。それ相応の償いはさせていただきます」

淡々と、静々と、肅々と。

足りない。

足りない。

情報が足りない。

オレは下っ腹に力を込め、震えだしそうになる全身を押さえた。

「じゃあ白根、その償いつての、『情報』という形でオレに渡してくれないか？」

声が震える。

「情報ですか……いいでしょう」

「逃げんなよ」

挑発的な言葉は、きつと白根にとって何の意味もない。

それでも、聞きたかった。

オレの中に芽生えた、経験則に基づく予感を確かめるため。

「オマエがオレを探し人と見誤った理由を教えてくれ」

「それは」

「探し人に関しては秘則だ、ってんだろ？　それなら、余計な事は言わなくていい。オマエがなぜオレと間違えたのかを簡潔に説明しろ。それなら、オレに対する過失の説明であって、オマエの言う『

「搜索対象」の事を話すわけじゃなくなる。被害者に対して過失の弁明と説明をするのは、加害者の義務だぜ？」

「そうですが」

「オマエの秘則事項は、『搜索対象』の事だ。オレについての事じゃないし、オマエの失敗談を口止めされるわけでもない……まあ、間違えた事を恥と感じて口を噤むなら止めないが、さっきオマエは『償う』って言ったわけだからな。それなりの説明はしてもらうぜ？」

「……」

白根は、少しの間迷ったようだった。

もちろんそれは、沈黙から判断しただけであって、断じて白根の表情が変化したというわけではない。

「わかりました。誰にも話さないと、約束してください」

よし、オチた。

口先上等、今のオレには情報が必要だ。

「私は、あなたの顔を見たわけではありませんし、名を知っていたわけでもありません。私に与えられた情報は、ただ、『珪素生命体を破壊できるモノ』だという事」

「珪素生命体を破壊できるモノ？」

「はい。私は一年前、この街に迷い込んだ珪素生命体を追っていました」

一年前。

梨鈴。『異属』。破壊。衝動。そしてマイクロヴァース

ああ、分かった。

オレには白根の探しているモノがわかってしまった。

「しかし、その珪素生命体は、何者かによって破壊されました」
よく知っているよ。

オレはその現場にいたからな。

「そして私は今回、再び珪素生命体を追ってここへやってきました。そして、第一命題を得たのです」

「……」

「聞き込みの結果、一年前までここにいた珪素生命体^{シリカ}は、あなたに一番懐いていたという情報を得ました」

まるで箇条書きのような報告だ。

オレが口を挟む隙もねえ。

そして聞き込みでオレに対象を絞るなんざ、ストーカーもいいところだぜ、全く。

「ですから、私はあなたがそうではないかと思ったのです。申し訳ありませんでした。知っている人間に似ていたというのは、虚言です」

ああ、まったくもう、ふざけんなよ、マジで。

オレの嫌な予感ってのは当たるんだ。

「私が探しているのは、珪素生命体^{シリカ}を破壊できる『ケモノ』です」
残念ながら、白根の探している相手は、オレじゃなかったらしい。そりゃあそうだ、オレなんて探して監視したって、何の得にもなりはしない。

もしでかい組織が探して監視するとすれば、その相手はオレじゃなく、オレの同級生。

「人の身でありながらうちにケモノを宿す規格外のイキモノ。それが、私の第一命題です」

その瞬間、オレは思った。

きつと、世界は夙夜を放っておかない。

オレなんかにはどうする事も出来なくなる時がいつかやってくるいや、すでにオレには手を出す隙も口を挟む隙もないのかもしれない。

そうだ、だってオレには何も出来やしない。萩原が死んだ時だって、梨鈴が消えた時だって。

ちくしょう、そんなこと、分かってる。最初からオレが凡人だったことなんて、分かってる。

何故わざわざオレの傷を抉るような事をするんだ。

燃え尽きにも似た脱力感、虚無感、無力感。
諦めと切望のはざまでもがく、滑稽な道化師。

オレは『口先道化師』 モノガタリの、蚊帳の外。

もう一度現実を突き付けられ、オレは肩を震わせた。
困って困って、どうにもリアクションが取れなくなった時、人間
ってのは笑うように出来てる。

「はは……そうか、そうか」

それでも、いくつかの出来事の謎は解けた。
足りない情報は、あと一つ。

真実に傾くシーソーに乗せる、最後の一つ。
その一つさえ、見つければ。

「あばよ、白根。オレはもう二度とオマエの顔なんざ見たくねえ」
オレは決意を握りしめ、転校生に背を向けた。

09 : アルカンシエルの店長と叔母

萩原の葬式の日、サクラ満開の暖かで穏やかな日だった。

オレと夙夜は、桜崎高校からそう遠くない、観光客もちらほら見られる、そこそこ有名だという大きな寺で行われる葬式に向かっていた。

高校生のフォーマル、制服に身を包んで。

式はすでに始まっていた。

何の事はない。オレの隣のこのマイペース同級生が寝坊しやがったというただそれだけの理由だ。

会場だけじゃなく、その周囲までしめやかな雰囲気包まれていて、会場に近づくにつれ、夙夜への嫌みを連発していたオレも自然と静かになった。

少し視線を巡らせれば警察の姿が見え隠れしている、葬送と似つかわしくないこの光景、見ていると鬱になりそうだ。

「あ、柊。香城も来たか」

「遅かったね」

会場に到着したオレたちを、他のクラスメイトが出迎えた。

皆一様に制服姿で、まるで朝、登校して教室に入ったかのような錯覚に襲われる。

いつもまとめ役だった萩原がいない。

不思議な感覚だった。

普段なら絶対に我慢できない筈の長い読経が、オレの中を沈めていく。部屋全体を包み込んで、すすり泣く声も沈鬱な空気も全部とりこんで。

淡々と、静々と、粛々と。

昨日から理不尽な事件の連続で煮詰まっていたオレの頭は、少し

ずつ整理されつつある。

あと一つだけ足りないピース。

線香の匂いが、現実を意識を引き戻す。

美人ってわけじゃないけど女の子らしくて、明朗快活、文武両道の女子高生。萩原の遺影を睨に焼きつけて、オレはしばらく目を閉じる。

萩原、オマエ、なぜあの場にいらしたんだ？

オマエも何か関係があったりしたのか？

あんな処にいなければ、あんな事にはならなかったのに。

あとひとつは、オレが必ず見つけて見せるから。

萩原の弔い合戦、なんていうとカッコいいが、そんなもんじゃない。

特別仲良しだったってわけじゃない。

でも、アイツは『才女』だったから、ちょっとズレているオレたち文芸部の事さえフツウに見守っていてくれた。

真実を求める動機なんて、それだけで十分じゃないか。

これはオレの意地。『口先道化師』『部外者』『傍観者』『名前だけ主人公』その他もろもろ、多くの名を抱えたオレの精いっぱい抵抗。

世界の方がオレを選んでくれないのなら、オレが世界を選んでやるよ。

そう思った瞬間、オレの目の前からあれだけ消えてくれなかった血濡れの裏庭が、ふっと消えた。

呪文のように響く低い読経に紛れて、オレは隣のマイペース男に声をかけた。

「なあ、夙夜」

「なあに？ マモルさん」

「少しだけ、手助けしてくれないか？」

オレが、そちら側の世界に飛び込む手助けを。

そんなオレの言外のコトバは伝わったのだろうか。

「いいよ」

いつものノーテンキな笑顔。

「さんきゅ」

笑顔。

ありがとな。

ところがどっこい、気持ちが高揚したって、体がついて来るわけじゃない。

何時間もの正座に耐えたオレの足は、とつくに限界を越えていた。やべえ、これ、オレの足じゃないみたいだ。

と、見渡せば同じように崩れ落ちるクラスメイトたち。

「みんな大丈夫？」

既に立ちあがって全員を見渡しているのは香城夙夜。

この野郎、一人涼しい顔しやがって！

「何でお前は平気なんだよ、香城！」

「んー、俺、田舎育ちだから？」

「知るかボケえ！」

高校生たちのうめき声（死を悼んで発しているわけではない）が堂内に響き渡った。

なんとかシビレ地獄を脱出して寺を出たオレは、とりあえず夙夜を連れて先輩の働く店に向かっていた。

昨日の晩の、珪素生命体との約束を守るため。

桜崎通り裏手の、花屋『アルカンシエル』 フランス語で『虹』という意味。

からんからん、と軽快な音を立てて扉を開くと、聞き慣れた声が迎えてくれた。

「いらっしやいませですう」

くるりと振り向いた先輩は、前回と違う衣装で花の中に立っ

た。

今回のコンセプトは、『風車の少女』。赤いベストと長めのスカ
ート、白いエプロンも眩しく、足元は木靴、とまあディテールまで
凝っている。

まるで操り人形が生命を得て動き出したかのようなうだ。

くつく、と笑うと先輩はむっとした顔をした。

「人を見て笑うなんて、マモルちゃんは失礼なのです」

「すみません、先輩が、あまりに……」

「あまりに、なんですか？」

「……可愛らしかったのだ」

オレの答えがお気に召したのか、先輩は機嫌を直してもう一度花
の水やりを始めた。銀色の如雨露ジョウロから、きらきらと水の雫が注いで
いく。

「元気そうでよかったのです。昨日のマモルちゃんは今にも死にそ
うだったのですよ？」

「すみません、ご心配おかけしました」

「ふふふ、で、今日はいったいどうしたのです？ 元気な姿を見せ
に来てくれたわけじゃなさそうですよ？」

「ええ、そうです」

先輩は、こう見えて鋭い。

そうじゃなきゃ、オレや夙夜にあだ名をつけたりなんかできない
が。

「先輩、珪素生命体シリカに興味、ありませんか？」

ひととおりオレの話を聞いた先輩は、にこりと笑った。

「ワタシも行きます。連れて行ってほしいのです。その子に会って
みたいのです」

そしてエプロンだけを外すと、奥に向かって声をかけた。

「カスミさん！ ワタシ、ちょっとだけ外出したいのです」

すると奥から、妙齡の女性の力ない声が返ってきた。

「んー、構わんよ、私は今日、本職が休みだからここでゆっくりしようと思ってたところだ」

「ありがとうなですう」

「何より、可愛いスマイルの頼みを私が断るわけないだろう？」

きゅっきゅ、とスニーカーの音。

奥から、声の通り、妙齡の女性が現れた。

少し眠そうな瞼、ラフなシャツ姿で七分のデニムにスニーカーという、さっぱりした印象の装い。真ん中で分けた長い亜麻色の髪がさらりと揺れた。正統派ではないが、人目をひく美人だ。年齢は20代半ばと言ったところか。

すらりとした長身は、オレより高いかもしれない……いや、オレまだ成長期だから。まだ伸びるからね。

どうやらこのヒトが花屋の店長と思われる。

するとそのすっきりした美人は、オレの隣のヤツを見て肩を竦めた。

「おお、夙夜、お前も来てたのか」

は？

何？ オマエも知り合いか？

「へへ、久しぶり」

「何だよ、元気なら連絡くらい寄越せよ！ 心配するだろ！」

「でも、叔母さん、忙しいと思って」

「そんな余計な気遣いはいらん。お前の生活費を払ってるのは誰だと思ってやがる」

大股で歩いてきて夙夜の鼻をつまんだ彼女は、やはりオレより背が高い。

いや、ちょっとだけだぜ？ 2センチ、4センチ……いや、5センチくらいかな。

ヒールだつてんなら分かるが、スニーカー。好意的に見積もっても170後半は……

「じろじろ見るな、少年。私がデカイから気にしてるんだろっ？」

「あ、いや、そんな事は」

「いやいやいいんだ、馴れてるから」

ひらひらと手を振る店長。指長え。ピアノとか得意そう。
ってかおい、フったのはそっちだろ。

ヤベえ。

オレの中の警鐘が鳴る。

悪いが、すでに天然を相当数抱え込んでるんだ。これ以上オレは
突っ込めないぞ？

「が、このメンバーという事は、お前が『マモルさん』か」

「あ、オレ、柊護ひいらぎのです。初めまして」

「やはりそうか。そうじゃないかと思っただんだ」

うんうん、と勝手に頷く女性。

何者だ。

そのさつぱりした美人店長は、同じくらいの身長 of 夙夜の肩に手
を置き、にやりと笑う。

「私は香城珂清「いんぎょうがすみ」。この、香城夙夜の叔母にして、養い主だ」

ああ。

この話聞かなさ具合と、あとそのやる気なさげな目も、並ぶとち
よつと似てるな。

とりあえずなぜ夙夜の叔母が先輩の花屋の店長で、夙夜の養い親
なのかは不明だが。そして年齢が少々若すぎる気もするが、女性に
年を聞くなどという失礼を犯すわけにもいかない。

「お前の事は夙夜とスミレからよく聞いている」

ああ、出来る事なら関わりたくねえ。

しかし、この状況で関わるな、というのは不可能。

「……お二人には、お世話になってます」

ああ、どこへ行く、オレの日常。

オレ自身を置いて行かないでくれ。

10 : 名付け親と天狼のモーメント

一年以上前、この場所で、ぼこぼこに殴られて顔を腫らしたアイツは言った。

『マモルさん、ヤマザクラの花言葉って知ってる？』

『……知るか』

『あなたに微笑む、だよ』

だから何だ、ともオレには言えず、珪素生命体シリカのキツネ少女が最後にくつきりと焼き付けていった脳裏の笑顔に、胸を締め付けられていた。

一瞬フラッシュバックした過去を拭い去り、オレはもう一度、散ってしまったヤマザクラを見上げた。

高校の裏にある山の中、ぽつりと佇むヤマザクラは、一年前までオレたちと共に在った梨鈴りりんという名の珪素生命体シリカの墓標。

オレたちに懐いていたキツネ少女の梨鈴は、突然この街に現れた『異属』と戦ったが、負けてマイクロヴァースが発動し、消えた。

ようやく傷つかずに口に出せるようになったその記憶は、今も新しい。

桜崎高校の所在地は、都内とはいえ3方を山に囲まれた半盆地で、高校から15分も歩けばすぐ登山道にぶち当たる。

その中でも、標高も低く登りやすい、定年後のハイキングコースよろしく高校の裏に聳そびえるのが『神楽山』だ。春は桜、秋は紅葉、その合間にも新緑や雪景色を楽しませてくれる、地元密着型の山、よく地元の小学校校歌に登場するアレだ。

かくいうオレの母校の校歌にも登場する『雲に聳える神楽山生徒見守り微笑んで』なんてな。

オレはゆっくりとヤマザクラの樹の下に座った。そこは、花びら

で桃色の絨毯になっていた。

少し、太陽が傾いて空に橙色が見え始めている。

昨日から絞られ続けたオレのココロは豆腐の搾りかすくらいにぼろぼろだぜ。

しかし、思い出の残るこの場所は、ほんの少しだけオレを落ちつけてくれた。夙夜も先輩も、きっとそれを知っている。

「ふふ、ここに来るのは久しぶりなのです」

オランダ衣装でくると野原を駆ける少女。なぜだろう、年上だというのにとっても微笑ましい。

あ、オレ今、現役男子高校生にあるまじき遠い目になってねえ？

暖かい風が吹き抜ける場所。

梨鈴の眠る場所。

「あ、来たよ」

夙夜の声がする。

そして、ソイツが指さした先には、昨日の晩に邂逅したネコ少年が立っていた。

暗闇では分かりにくかったが、少々生意気そうな目鼻立ち、すんなりと細くのびた手足、しなやかなネコの珪素生命体だ。シリカ

「来てくれたんだね、お兄さん」

「ああ。約束しただろ？」

肩を竦めると、ネコ少年は恐る恐る広場の中心に出てきた。

一番近くにいた先輩が、その少年の元に駆けつけて、よく梨鈴にしていたようにぐりぐりと頭を撫でまわした。

突然の出来事に反応できなかったのか、少年は硬直するが、先輩はそんな事お構いなした。

「ふふふ、可愛いのです。おめめが蒼いのです。綺麗なのです。明るいお星さまみたいなのです」

「せ、先輩、その子困ってるから……」

「ちよつとだけ、知ってる子に似てるのです」

一瞬。

ぽつりと呟いた先輩は、すぐににこりと笑い、その少年に名前を付けた。

「キミは『シリウス』なのです。おめめの色と一緒になのです」

少年は呆然とした。

が、すぐにそれが自分に付けられた名なのだと知り、ぴいんとしつばを立てた。

あ、喜んでる。

「シリウス、か。よろしくね、シリウスくん」

空を向いた尻尾を左右に揺らし、耳を動かしながら、ネコ少年、改めシリウスは夙夜にお愛想し、オレの方に寄ってきた。

いや、間違い。

一足跳びにオレへと襲いかかってきた。

「ぎゃーっ！」

思わず悲鳴をあげて死のタツクルを避けたオレに、先輩の不満げな声がかけられる。

「マモルちゃん、シリウスくんの感謝の気持ちを避けちゃダメなのです」

「んなこと言っても、確実にオレ死ぬ！ 珪素生命体シリカのタツクルなんて食らったらオレ、死ぬから！」

先輩相手に敬語を忘れて叫び上げ、オレはシリウスから距離をとった。

無理無理無理。

オレとシリウスが睨みあう中、夙夜がのんびりとオレに言う。

「当たる瞬間に、ちよつとだけ急所をずらすんだよ。そしたら死なないから」

「バカ野郎、オマエ、自分の事じゃねえからって、しかも当たる瞬間に避けるとか、オレはオマエじゃねえんだよ！　そして死なねえからっていいわけでもねえ！」

死ななくても大怪我だろうが！　マジで！

そんな様子をくすくすと見守る先輩。

あ、こんな光景、見たことある

油断した次の瞬間、凄まじい重さの珪素^{シリカ}生命体の体がオレの背中に直撃し、オレは、地面と仲良くごつつんこした。

春の陽気の中、野原でじやれること約一時間。

オレの体力はもう限界。

もう無理、マジ無理というオレの必死の訴えで、帰還が決定した。それには、先輩と夙夜の腹ぐらいも関係しているに違いないのだが。

「ねえ、お兄さん」

「オレは護^{まも}た」

「じゃあ、マモル。また、会える？」

シリウスの瞳。

蒼い、蒼い、硝子玉のような感情ない瞳。

「ああ、たまには、遊びに来てやるよ」

「ありがと」

彼らは、笑わなくても全身で表情を示す。

ほら、今も嬉しそうに尻尾が左右に揺れている。

そうだな、明日も来てやろうかな。

山を下るオレは、言わずとも何かを心に抱いていた。

それは、シリウスに見た梨鈴の面影だったり、楽しかった青春の日々　　というには脚色が過ぎるが　　だったりした。

あれから一年も経つのか。

初めて感慨深く思い出す事が出来た。

「ワタシ、今度はお花の種を持って行くのです。シリウスくんと一緒に植えるのです」

嬉しそうな先輩の赤いリボンがくるくると風を巻き込んで翻る。

「楽しそうですね、先輩」

「ありがとうなのです、マモルちゃん。シリウスくんは、きっといい子なのです」

「また一緒に遊びに行きましょうよ。放課後、迎えに行きますから」
「うふふ、いいですねー」

「でもその時は、あの、ピンクのエプロンドレスがいいと思いますよ、オレは」

そう言うと、先輩はきょとん、と首を傾げた。

「そうなのですか？ でもマモルちゃんがそう言うならそうするのです」

よし、ぐっじょぶオレ。

そんなオレたちの様子を、少し後ろから夙夜が見ている。

誰にも聞こえないように、ぼつりと呟いて。

「ごめんね」

聞き間違いかと思ったが、それはどうやら夙夜の口から漏れた言葉らしい。

何がだ、と聞き返そうとした時、なぜか、オレたちの目の前に制服を着た警察官が二人、立ちはだかっていた。

待ってくれ、どういう状況だ、コレは。

目の前に警官が二人、どう見ても友好的な関係を築けなさそうだ。一人は若くて背の高い、精悍な印象の警察官。もう一人は、それより少し年上の、やる気なさげなおっさん刑事。ばさばさと無精ひげが生えている。

そして、特別刑事ドラマが好きでもないオレでも言われる前に予想できる、言い古された言葉が待っていた。

初めて目にする警察手帳を目の前に突き付けて。

「柊護くんと香城夙夜くんですね？ 桜崎警察の者です。ちょっと署までご同行願えますか」

できればもう少しひねった言葉を使って欲しかったよ、刑事さん

たち。

昔に比べるとかなり視聴率が下がってるという、毎週火曜の刑事ドラマの視聴率を上げるためにもな。

11： 若き刑事のクローズドルーム

警察署つてのは、もっと汚い所かと思っていた。

駅から徒歩約10分、車で来たから正確な距離は分からないがそのくらいだろう。

想像と全く違う3日前に立てたかのようなピカピカのビルの中に連行されたオレたちは、想像よりずっと綺麗な、まるでデザインマンションの一室かと思紛うような整然とした部屋に通された。

窓枠のデザインセンスがわかんねえ。サンカクとシカクを重ねたからって、アートになるわけじゃねえだろ。ピカソにでも基礎から習って来い。

おお、机の天板もすべすべだ。

でも、なぜ椅子だけがぼろぼろのパイプ椅子？

目の前に座って資料を広げ始めたのは、さきほどオレたちを連行した若い刑事だった。

これが噂の取り調べてヤツだろうか。

「ええと、柊衛^{ついで衛}くん、と、香城^{いづみぎの}夙夜^{ふくや}くん、であっているね」

「はい」

精悍な顔立ちと、子供に媚びるような口調のギャップが気に入らない。声もバリトンなのだから、もっと厳^{イカ}つく喋^{イカ}ってほしいところだ。

ここまで猫なで声が似合わないキャラクターも珍しい。

夙夜は大人しく隣に座っていた。

「先日君たちの高校で起きた事件については、分かっていると思う。クラスメイトである萩原^{はぎわら}加奈子^{かなこ}さんが裏庭で殺害され、その後、死体が放置された。その現場を写した生徒の携帯写真に、君たちの姿があつたが、事件現場にいた事は相違ないかな？」

「はい、そうです」

なるべく、感情を出さないように。動揺を悟られないように。

それはオレのちっぽけなプライド。

葬式で号泣したクラスメイトたちを見て目頭が熱くなっても泣かないよう我慢した時と同じ気分だ。

本当なら、思い出させんバカ野郎、と怒鳴りつけてやりたいところだったが、まさかそういうわけにもいかない。何しろ相手は警察官なのだ。オレみたいな一般高校生に太刀打ちできる敵じゃない。「では、その日の出来事を、順を追って教えてくれないかな？」

「はい」

オレはまるで白根のように淡々と、静々と、肅々とその日の出来事を説明していった。

が、現場に辿り着いたあたりで、オレの話は止まった。

「……あ」

声が出なくなる。

あの惨劇を言葉に表そうとすると、喉が張り付いて、カラカラに乾いて、息が困難になる。

体が伏せて、萩原の顔は空を見て、そして絶対的切断面がオレを見て。

その様子を見て、その刑事はふと調書を書く手をとめた。

「ああ、無理はしなくていい。あの現場を見た生徒さんは、みなそうだったから。柊くん、君はそれに比べるとずいぶんしっかりと話してくれたよ」

みな、という事は、あの場にいた全員がココに呼ばれてるって事か。

オレたちが特別ってわけじゃなさそうだ。

「待ってください」

それでも、オレは口に出すべきだろう　　口先道化師の名に賭けて。

そして、萩原の死を忘れないために。

「ちゃんと、最後まで話しますから」

微かに震える手を膝の上でぎゅっと握り拳に。

夙夜の心配そうな顔に横目で気付いている中、オレはゆっくりと話を続けた。

「現場はすでに人ばかりでした。でもオレは、その場に到着してすぐに、人と人の頭の間から、萩原の死体を見ました」

フラッシュバック。

血。切断面。顔。

今でも鮮明に思い出せる。

「最初に見えたのは首の、切断された部分です。もう全部血が流れ出して、芝生が赤黒く固まって、そのせいなのか、面がくつきり見えなです。オレは生物選択じゃないから詳しくは分かりませんが、気道だとか、太い血管だとかが切断された断面が丸く見えなした。白いものもあつたけど、もしかすると骨かもしれない」

ああ、気が遠くなりそうだ。

「人だから悲鳴が上がっていました。たぶん、女子生徒が多かつたと思います。やじ馬で駆けつけた生徒です。少しずつ、倒れたりとか、逃げだしたりとかして、それで、ちょっとずつ人が減りました。校舎の上の階から写真を撮ってるやつもいたみたいです。オレたちが写真に写つたとしたら、その時だろうと思います」

キモチワルイ。

「人が減つて、死体のはっきり見えました。死体は　萩原は、体はうつ伏せになつてるけど、顔は上を向いてました。うつろな目で、表情で空を見ていました」

キモチワルイ。

「苦しそうじゃなかつたから、きつと一瞬で死んだんじゃないでしょうが　そんな事、彼女にとっては何の救いにもなりませんけど」

キモチワルイ。

「そのくらいに、やっと教師が大きな白い布を持ってきて、萩原に掛けました。でも、萩原は最後の一瞬までうつろな目で空を見上げてた　オレが覚えてるのは、そこまでです」

気持ち悪い。

どうやらオレは意識を飛ばす事なく最後まで話しきる事が出来たようだ。

「辛い話をさせてしまったね、ありがとう」

大きく、息を吐く。

まるで何千メートルも全力疾走した後のようだ。全身に汗をびっしょりとかき、固めた両手は膝の上でぶるぶると震えていた。

それでも最後まで話し終えた。

一種の安堵がオレを包む。

が、それは次の刑事の言葉で一気につぶされた。

「ところで 君たちは、一年前まで『リリン』という個体識別称を持つ珪素生命体と行動を共にしていたという事を聞いたが、事実かな？」

「……ええ、本当です」

あ、警鐘。

珪素生命体^{シリカ}関連は口に出せない、とてもじゃないが警察にバレちゃまずいことばかりしている。

一年前に夙夜が梨鈴を消した『異属』^{タンソ}を有機生命体の身でありながら消し去った事。今回の事件に関連する水晶の爪を持つモノを二人知っている事。

それどころか、珪素生命体^{シリカ}に名をつけ、友好関係を築いている事。何も話せない。

どれもこれも法に引っかかりかねないし、何より夙夜的能力がバレてしまう。

「一年前まで、という事だが、その後の珪素生命体^{シリカ}の行方は？」

「……街にやってきた『異属』と相打ちになって、消えました」
これは用意していた答えだ。

梨鈴を消した『異属』をここにいる夙夜が消したとは、まさか口が裂けても言えない。

「相打ち、ね。じゃあ、ここ一年、他の珪素生命体^{シリカ}との接触は？」
「ありません」

少し、罪悪感。

一瞬だけ白根が警察と共謀する可能性を疑ったが、その疑いはすぐに消えた。

もしそうなら、容疑者の珪素生命体シリカと慣れ合っており、それを白根にばつちり目撃されたオレはとくに逮捕されてるはずだ。

その途端、刑事の目が一気に厳しくなった。口調も荒くなる。

「本当か？ 一度ヤツらに魅入られた人間のもとには、再び珪素生命体リカが訪れるというが？」

「知りません」

オレがなるべく波風立てないように返答していると、突然夙夜が割り込んできた。

「それって、殺人事件の凶器が『水晶の爪』だから聞いているの？
だとしたら、もういいよ。だって俺達はそんな武器、持ってないんだから」

おい、夙夜。それは

その瞬間、前の席に座っていた刑事が持つ鉛筆の芯がぼきっとものすごい音を立てて折れた。飛んだカケラがオレのすぐ横をかすめていく。

「なぜ、それを？」

水晶の爪が凶器。

そう、夙夜にとつては当たり前に分かる事は、一般人にとつて当たり前ではない。

「だって、俺はマモルさんと一緒に現場を見たんだよ？ だから、知っててもおかしくないでしょ？」

「あの傷が水晶の爪によるものだという事は、見て分かる事ではない」

「分かるものは分かるよ、それは仕方ない。それなら隣の部屋の……あ、やつぱ、何でもない」

このタイミングでそれか！

普通聞こえないはずの声を盗み聞くのはやめろって言ってるだろ！

刑事は頭に血がのぼりかけていたせいで気にしていないようだが、隣に座っているオレはひやひやしている。

「この件に珪素生命体シリカが関係している事は極秘事項だ。お前達は、いったいどうやって、どこで、その情報を手に入れた？」

おやおや刑事さん。そんな簡単に認めちゃって、いい刑事さんになれないよ。それだけ動揺するほどの情報だって事だが。

それはそうだ。珪素生命体（シリカ）は、有機生命体タンソに無干渉であるからこそその自由を保っていたのだ。珪素生命体シリカがニンゲンを傷つけたとなると、政府の対応自体が、大きく変わってしまう可能性がある。

「だから見たから分かるって言ってるんだ」

悪びれた様子のない夙夜は、心の底から本気だ。

理屈ではなく、彼には分かるのだ。なぜわかるのだ、と聞かれても、『分からないニンゲン』にはいくら説明しても無駄らしい。分かるものは分かる。

夙夜はいつでもそう言い張るし、そしてそれは真実なのだろう。

「言え！ 何処で聞いた！」

とうとう声を荒げた刑事にも、しかし夙夜は一步も引かなかった。「だからさつきからずっと言ってるのに、どうして聞いてくれないの？」

あれれ、これはもしかして、普段怒らない夙夜が若干イライラしているのでは？

やべえ、珍しいもん見た。

「このガキども……」

最初の猫なで声はどこへやら。完全に化けの皮が剥がれた若い刑事は、がたん、と席を立った。

その方が似合うよ、刑事さん。

「このまま拘束する事も出来るんだぞ？」

「どうやって？ オレたちは犯人じゃない」

おおっと、脅しモードですか？

というか夙夜くん、今日は見た事無いほどの戦闘モードですねえ。完全傍観者を決め込んだオレは、いつもの立場と逆転して、ノーテンキにコイツを見守る事にした。

「もう我慢ならん、お前らを重要参考人として
と、そこまで言いかけた時、こんこん、とドアをノックする音がした。」

その音で我に返ったのか、刑事は曲がったネクタイを直し、部屋の外へと出て行った。

「そこで大人しくしている」
分かりやすい捨て台詞を残して。

12 : 叔母と国家権力の白珊瑚

嵐の去った部屋で、オレは肩を竦めて夙夜を見る。

いつの間にか、コイツはいつものほのぼのモードに戻っていた。

「おい夙夜、どうすんだよ」

「んー、大丈夫じゃない？ スミレ先輩が叔母さん呼びに行ったから」

「は？」

オレは首を傾げたが、夙夜はにこにここと笑うばかり。

「それよりマモルさん、相手が失礼な時は怒ってもいいんだよ」

「失礼？ 何が？」

「ええと、わざとけしかけて辛い話させたり、それで弱ったところに一番重要な質問を持ってきたり」

「……」

ああ、そうだな。

まんまと相手の術中にはまるところだったよ。

この無関心野郎がオレの為に怒ってくれた……と、一応のところ喜んでいいんだろうか。

ちらりと見た夙夜は、いつもと同じようにへらへら笑いながら机に頬杖をついていた。

「あの人があんまりマモルさんを苛めるから、間違えて喋っちゃったじゃん」

うわあ、泣きそうなほど嬉しい台詞だが、本気で悲しいのは何故だろう。

「……バカ野郎、助けなんかいらねえよ」

「あ、ひどいなあ」

顔を見合せて笑い合った時、再び部屋の扉が開いた。

惘然とした表情の刑事は、吐き捨てるように言い放った。

「身元引き取り人だ」

そう言つて刑事がいつぱいに開いた扉の向こうから姿を現したのは、他でもない、朝に花屋で初めて会つたばかりの夙夜の叔母、香城珂清じょうかすみその人だった。

花屋の店長、かつ夙夜の叔母の香城珂清がなぜここに？

見れば、オレたちの話を聞いて頭に血が上つていた若い警官は、彼女に敬礼をしている。

え、何？ これ、何？

「どういう事ですか？」

「夙夜とお前の身元を引き取りに来たんだよ。感謝しろ。特にそのごく潰し」

「はい、ありがとう、叔母さん」

のんびりと返事をした夙夜は、感謝が軽いんだよ、と珂清さんに首をホルドされていた。完全にキマっているらしく、夙夜の口はぱくぱくと動くだけで声は出していない。

ご愁傷さま。そのまま苦しそうな笑顔で成仏しろよ、夙夜。

「でも、何で珂清さんが？ しかも、警官のあの態度……」

オレは、確実に彼女に敬意を払っているように見える警官をこっそり指した。

すると。

「ふっふっふ。疑問はもつとも。そう、ある時は花屋『アルカンシエル』の店長、またある時は夙夜の叔母兼養い親、そしてその正体はっ」

いや、その古臭い枕詞いりませんよね？

「聞いて驚け！ 私は国家権力だ！」

彼女は自信満々でオレに指を突き付けた。

やっべえ、どっから突っ込んでいいのか分かんねえ。

国家権力はヒトじゃねえからイコールで『私』にはつながらねえし、まったく威張るポイントじゃねえし、オレの問いに何一つ答えねえ。

そこでようやく夙夜の首を放して、珂清さんは肩を竦めた。

「まあ、詳しい事は言わんが、私の本職はそこその権力を有しているという事だよ、少年」

「はあ……」

腑に落ちないが、まあいいだろう。

とにかく助かった事に変わりはない。

「あー、そうそう。夙夜、お前のクラスメイトがもう一人、隣で拘束されてたが、そっちも助けた方がいいか？」

「うーん、でもハラダくんは第一発見者だし、たぶんすごく重要な証言をしているところだから、もうちょっと待つて」

「……これだからお前が監獄内にいるのは危険なんだ。ここでは他の事件の取り調べなんかもしてるんだから、不用意に聞いた事を口に出すなよ？」

「分かってるよ、叔母さん」

どうやら叔母さんとやら、夙夜的能力について知っているらしい。なんだかほつとした。

夙夜の並はずれた能力を知る人が他にもいて。

「あと少ししたら迎えに行つてあげて。ハラダくん、好きな人が死んじゃったのは自分のせいだつてすごく落ち込んでるから」

「はいはい。叔母使いの荒いガキだな、このヤロウ」

「ごめん。でも、叔母さんにしかできない事なんだ」

その言葉で、珂清さんはしょうがないな、肩を竦める。

う、コイツ、天然タラシか。

？

ちよつと待て。今の台詞、思い出せ。

夙夜は今、なんて言つた？

『ハラダくん、好きな人が死んじゃったのは自分のせいだつてすごく落ち込んでるから』

自分のせい？

なぜ？

原田が殺したわけでもないのに、『自分のせい』？
何だそれ、どういう事だ？

あ。

かちり。

音を立てて、最後のピースがはまる。

それは『偶然』という名の見えないカケラ。

分からなかった一つだけ、なぜ萩原は裏庭にいたのか。
傾いたシーソーが一つの真実を指し示す。

ああもう、考えても分からないはずじゃないか。

「……なんて、滑稽な」

もれた台詞すら陳腐だった。

まさかこんな結末。

なんてくだらない結末。

明かす価値もないような、まるで萩原の死をあざ笑うかのような
真実。

「萩原……」

一瞬で命を絶たれたのがせめてもの救い、だなんて、何の気休め
にもなりやしない。死んでしまえば全部一緒だ。

^{タマシイ}魂は壊れ、^{カラダ}軀は朽ち、後には何も遺さない。

マイクロヴァースに喰われて消える、珪素生命体^{シリカ}と何も変わらない。
い。

「どうした？ 少年」

突然黙ってしまったオレに、珂清さんは首を傾げる。

「なるほど、だから『ごめんね』か……」

あの時夙夜が呟いた言葉。

「ごめんね、マモルさん」

もう一度夙夜が言う。

ああ、やっぱりそうなのか。やっぱり、真実はそうなのか。

思い描いた何通りかのうちでは、最悪の結末だ。
本当に最悪。

この結末を夙夜が知ってやがったって言うのが、もっと本当に最悪だ　災厄だ。

いんぎょむくや
香城夙夜、18歳男。高校3年生になりたてで18歳ってのは、
どうやら一年分、ワケあり。極度の甘党。とくにプリンが好きで、
新作のコンビニプリンが出る度に買い込んできては勝手に批評する。
知力、体力、一見標準よりちよつと上。弱冠天然、いつもへらへらと
気の抜けるような笑顔で人当たりはいい。

その実、五感、いや第六感までズバ抜けて、ケモノ並み。それを
誤魔化すために適当な事を言い、会話で自己完結をするのだがそれは
全部天然で片づけられる。

ゴッドフアザー
『名付け親』枝守スミレは、一目見るなりこのマイペース男にあ
だ名をつけた。

『無関心の災厄』

それは、無関心が故に引き起こされる災厄。
分かっている口に出さない。出来る事をしない。
そして、最後に災厄を引き起こす、無駄な事件体質。
これは災厄。アイツの無関心がもたらした災厄。

警察署を出れば、すでに空には星が輝いていた。
冬の星座は、あのネコ少年の瞳と同じ色をしたシリウスは見当た
らなかったけれど。

明日仕事だからと先に帰ってしまった珂清さんを見送って、オレ
と夙夜は冷たい春の風に曝された。

「……少しだけ、寄ってもいいか？」

他にはなんの言葉もなかったというのに、夙夜はにこりと笑って

承諾してくれた。

13 : 真夜中の校舎のシリウス

キープアウトの黄色いテープもなんのその。

オレたちは夜の学校に忍び込んだ。

そして、他には目もくれず、裏庭に向かう。

静まり返って音はなく、新月の晩に光もなく、いくつか設置されているLEDの光を頼りに校庭を横切って行った。薄い影がオレたちについて来る。

闇夜に浮かび上がるサクラ色は、薄ぼんやりと夜風に揺れて、淡い記憶を刺激した。

裏庭にはあつちにもこつちにもテープが張り巡らされ、昼間の調査の跡を色濃く残していた。見張りの一人もいないのは、ここが学校で部外者立入禁止、桜崎高校の優秀なメインコンピューターが逐一侵入者を監視しているからだろう。

もつとも、生徒であるオレたちにそんな事は関係ない。

萩原が倒れていた辺りにはシートがかけられていて見えなかったが、夙夜はその場所に静かに手を合わせると、そこから最も近い校舎にゆつくりと歩み寄った。

何かを確かめるかのように、その壁に手を当てる。

その仕草は、誰かと交信するようにも、誰かに語りかけるようにも見えた。

「……なあ、まさかとは思うけど、夙夜、オマエ、最初から分かってた？」

「うーん、分かんないよ」

脱力するような答えを言うな。

オレがどれだけ悩んでこの答えに辿り着いたと思っているのか。

「でもね、ここに、ここにも、傷がついてる。全部、水晶の爪の傷だよ」

夙夜は校舎の壁を撫でながら答えた。

「それも、二種類。ホンモノと、ニセモノ。だから、シリウスともう一人いて、二人がここで争った事は分かった」

傷を見ただけで、それだけ分かるのか？

コイツは真実の化け物か。

「でも、オレに分かるのはそこまで。それ以上は分かんない」

「あの『偶然ここを萩原が通った』って事も？」

「それはさっき、ハラダくんの話で知った。俺には何にも分かんないよ、マモルさん。俺、マモルさんみたいにいろいろ考えるのは苦手なんだ」

「……そうか」

コイツは、『事実』は分かってもそれ以上は分らない。

ここで二人が争った事が分かっている、ここで萩原が死んでいたって事が分かっても、『その争いに巻き込まれた萩原がシリウスの爪にかかって死んでしまった』とは分からない。

だからこそ、災厄を引き起こす。

「偶然、だったんだよ。萩原は、あの時間に、偶然ここを通ってしまったんだ」

原田が校舎の裏に呼び出していたから。

ああもう、何でその日に限って。しかもそんな古典的な。

そして、その日に限って白根と遭遇したシリウスが、ここで激闘を繰り広げた。

偶然に通りがかった、萩原を巻き込んで。

「シリウスはだって、有機生命体自体に興味があるわけじゃねえ。ただ、オレたちに興味を持ったただだ。だから、興味のなかった萩原を傷つけたことに、何の感慨もなかったし、特別な事でもなかった」

たえそのつけた傷が萩原の命を奪っていたとしても。

なんてこった。

意図して悪戯に奪った命でなく、本能と衝動から奪った命でもな

く。

ただ、爪が通る直線状にいただけという理由で裂かれた萩原は、そのまま死んでしまった。きっと、アイツは、殺してしまった事になんて気づいていないだろう。

ニンゲンって、本当に弱い生き物だ。

一年前、梨鈴を消滅させた珪素生命体は言った。

『珪素生命体は有機生命体に干渉しないって言われてるけど、それは、興味ないだけだよ』

あの言葉が、今になって蘇る。

興味ない。

珪素生命体は有機生命体に興味がない。

「興味がない　か」

シリウス。

オレは、もしかするとこれからオマエを傷つけるかもしれない。

オレは、もしかするとすでにオマエに傷つけられたのかもしれない。

珪素生命体には有機生命体を傷つける理由がない。

珪素生命体には有機生命体を傷つけない理由がない。

まるで、不可思議な言葉遊び。

最後にはまったピースが『偶然』だなんて、オレには予想もつかなかったよ。

なあ、シリウス。

お前はオレたちに興味があるだけで、『有機生命体』に興味があるわけじゃないんだよな？

「マモルさん、悲しまないで。オレたちにはどうしようもなかった事だよ」

「……そうだけどよ」

気づきたくなかった真実。

知らないでいたかった現実。

オレはいつたい、次にどんな顔をしてシリウスに会えばいい？

それなのに。

オレの嫌な予感つてのは、大体あたるんだ。

野性のケモノ並みの勘を持つ夙夜ほどじゃないにしても。

「マモル」

ここにいるはずのない、いてはいけないはずの少年の声がする。

ある筈のない銀色の毛並みが夜風に靡いている。

少しだけぶるりと背筋が冷えたのは、冷たい風のせいだけじゃない。

「よかった、ここに来たら会える気がしたんだ」

「……シリウス」

芝生を乗り越えて駆けてきたのは、有機生命体用のセキュリティには反応しない、珪素生命体^{シリカ}の姿だった。

「どうしても会いたくて、降りてきたんだ」

「……シリウス」

オレは、これから何度もこの名を繰り返すのだろう。

しかし、オレは知ってしまった。

「どうしたの？ マモル」

「いくつか、質問してもいいか？」

「いいよ」

何の疑いもなく頷くシリウス。

「オマエ、最初に『異属』と会った場所、覚えてるか？」

「覚えてるって、ここだよ。この建物の、ちょうどココ。シュクヤが立ってるあたりだねっ」

「その時、オマエは戦ったよな？」

「うん、そんで、『異属』も応戦してきたよ。マモルだって見たでしょ？ 『異属』が僕に爪を向けたの」

「ああ、そうだな」

しかしあれは『異属』ではなく水晶の爪を持つだけの人間だった。

「じゃあ、シリウス」

「なあと、マモル」

シリウスは、名を呼ばれること自体が嬉しくて仕方がないらしい。ずっと、尻尾が左右に揺れている。

「ここで戦った時に、有機生命体タンシがいたの、覚えているか？」

「あ、うん、一人いたみたい」

「オマエは、その有機生命体タンシを傷つけなかったか？」

「うーん、よく覚えてないな……有機生命体タンシって、柔らかいから傷つけてもよく分かんないんだ」

「……そうか」

目を伏せたオレに、いったい何を感じ取ったのか、シリウスは首を傾げた。

ずっと左右に振れていた尻尾がぴん、と停止する。

「マモルさん」

夙夜が言う。

「初めて会った時に、シリウスから ニンゲンの血の匂いがした」

「ああ、そうか」

夙夜 やっぱりオマエは、最初から分かっていたんだな。

萩原はシリウスの爪にかかって死んだこと。

「シリウス。よく聞け。実は、ここで、オレの友達が昨日、死んだんだ」

「そっなの？」

首を傾げたシリウスは、本当に無垢な猫のようで。

オレは少しばかり胸が痛んだ。

「オマエの爪も、髪も、体全部、オレたち有機生命体タンシにとっては命を奪う狂気なんだ。ほら、お前の尻尾」

オレは、長い銀色の毛並みの尾を手取る。

びくりとしたところを見ると、梨鈴と同じようにシリウスもきつと尻尾を触られる事を極端に嫌う。

見た目にそぐわぬ無機質な手触り。

オレは、その尾をぎゅっと握りしめた。

鋭い痛みが走り、オレの手からは赤い雫が滴り落ちた。

「マモルが、傷ついた」

「ああ、そうだ。オマエとオレでは、造りが全然違うんだ」

ぱっと放した尻尾が、ぴんと天を指した。

動揺するように、小刻みに震えている。

「もしかして、気がつかない間にボクはマモルのお友達を壊しちゃったの？」

「……そうだ」

胸が痛い。

珪素生命体は、『異属』と認識したモノを見ると本能に逆らえない。

オレたちと一年間共に過ごした梨鈴でさえそうだった。

この場所で白根と相對したシリウスは、刻み込まれたその衝動に勝てず、白根に襲いかかり、そして偶然通りかかった萩原をその爪で傷つけた。

「マモルは悲しかったの？」

「ああ、悲しかった。友達だったから。オマエはオレや夙夜が消えたら悲しいか？」

「うん、悲しいよ」

「そうだ」

オレは、傷ついていない方の掌で、シリウスの髪を撫でた。

珪素ベースの生命体、その感触はまるで石を撫でたかのように冷たかった。

「だから、シリウスはその事を覚えておいてほしいんだ。それで、これからは有機生命体タンソに触れる時は気を付けるようにするんだ。わかったか？」

こんな事、本当はしちゃいけないのかもしれない。

たったこれだけの注意にとどめるなんて、オレは指導者としちゃ失格だ。

萩原の遺族とか、原田とか、警察とか、いろんな人たちがこの事件の為に働いているのに、オレの感情一つだけでこんな風に片付け

ようとする事自体が傲慢だ。

ただの高校生でしかないのに、ただ偶然シリウスと出会っただけなのに。

オレなんかが。

「でも、この話は、絶対に他のヤツにするなよ。オマエとオレと、夙夜だけの秘密だ」

世間に知らせるわけにはいかないだろう。

何しろ、コレが世間に知られれば、珪素生命体^{シリカ}全体の存亡が危うくなる。

「うん、わかった……」

シリウスの尻尾が地面につくほど垂れた。

「ふふ、マモルさんはきつといいお父さんになるよ」

「バカ野郎、そんな事言われて喜ぶ高校生がいるか」
思わず力が抜ける。

事故とはいえ、有機生命体^{タンソ}に無干渉であるからこそその自由を保っていた珪素生命体^{シリカ}に対するニンゲンの対応が、大きく変わってしまった可能性がある。

そんな大事、オレたちみたいな高校生が片づけていい問題じゃない。

でも、もし日本の警察が、あの若い刑事さんとかが優秀だったら、警察に夙夜と同じだけの情報を手に入れるだけの科学力が現在あるとしたら、おそらく露見してしまうだろう。

けれど、少なくともオレたちが自発的に話す事だけはない。

ところが、夙夜は困ったように笑っていた。

「マモルさん」

「何だ？」

まだ何か問題があるのか？

「あのねえ、アオイさんがこっちに向かってるんだ」

「……はい？」

この上、白根がここへ乱入する？

やめてくれ、收拾つかなくなるから。出来ればこのシリーズでプチ解決しました的なまま終わりたいから。

まあ、オレのやな予感てのは当たる……以下略。

それから夙夜、向かってるじゃなく、もう到着してると言っただけだった。

「現時点を持って私の第二命題は保護、から確保、に書き換えられました」

夜の校舎に凜と響く無表情美人の声。

「武力で以て、珪素生命体シリカを拘束します」

艶やかな黒髪を新月の夜風に靡かせて、白根が佇んでいた。

14 : 完全なる美の機械作業

「香城夙夜さん」

白根の声が低く、響いた。

靡く黒髪。白磁の肌、すっきりとしたアーモンドの瞳がオレと夙夜を交互に見やる。

闇のなかに浮かび上がったその姿に、オレは意味もなく釘付けになった。

「あなただっただのですね」

ぞくりと襲う、恐怖。

何？ いったいコイツは、何だ？

表情なく、作業機械ロボットのように話し、珪素生命体シリカと同じ武器を持つ。

「本日をもって、私に与えられた第一命題と第二命題は、真である事が証明されます」

ヤバイ。

いや、ヤバイなんてもんじゃねえ。

ホントのホンキで作業機械ロボットだ。

夙夜の無関心と対になる 無表情。

凪ナいのだ、何も。そこには、無いナ。感情と呼ばれるモノが、一切ナイ。

「白根……シリウスを連れて行く気か」

「それが私の命題です」

「シリウスは、連れて行かれた先でどうなる？」

「すでに人間を殺めてしまった珪素生命体アヤに下される決断です。私には断言できません。ただし、私たちは珪素生命体シリカを保護するモノです」

「保護つてオマエ」

オレはそこで言葉を失った。

白根は答えない。

夙夜も答えない。

シリウスも答えない。

暗闇の闇夜に夜風、風音、音無、無表情。

「白根葵。オマエは本当に……何者なんだ？」

「それは、秘則です」

オレの喉から呻きが漏れた。

「オマエ、人間じゃないのか？」

以前、同じ台詞を言った事がある。

その台詞は、先輩に陳腐だと一蹴されてしまったのだが、オレには学習能力がないのか、再びその過ちを繰り返してしまった。

ああ、分かてるよ。オレみたいな凡人には、そんな陳腐な言葉でオマエたちを表す事しかできないんだ。そっち側の世界にいるオマエたちに、どうしても近づけないんだ。

「^{ホントウ}真実にそう思いますか？」

何の迷いもなく漆黒の瞳で射抜かれて、オレは言葉を失った。

あの日、夙夜が言ったコトバ。

シラネアオイの花言葉 『完全な美』。

それは、外見の美しさなんかじゃない。

「私は白根葵。その名と命題以外には、何も与えられていません。しかし、私が通常生殖によって生み出された有機生命体^{タンシ}のヒトである事は間違いありません」

完全に統制されたその思考の事だ。

破壊された完全。美。奈落、回転、流転、その先に待つのは破滅

ああ、この転校生も、夙夜と同じだ。

オレとは全く別次元の世界で生きている。

彼女の言葉は、まるで魔法か呪文のようにオレに暗示をかけてその場に張り付けてしまった。

少し離れた所にいる、夙夜とシリウスに視線が移動する。

「邪魔をしないでください」

水晶の爪が、光る。

その瞬間、シリウスの空気が豹変した。くたりと垂れていた尻尾がぴんと立つ。全身の毛が逆立って、耳がぴんと立ち、みるみる瞳孔が開く。

そうか、あの爪が『異属』と勘違いさせる契機^{キイ}となるのだ。

一年前のあの時と同じ。

オレたちと共に在る珪素^{シリカ}生命体はどうしてもこの結末を望むのか？

「夙夜」

オレには、何も出来ない。

だから、助けてくれ。

視線でそう伝えると、夙夜はやっぱり困ったように笑った。

「マモルさんって、たまにオレに向かつて無茶言うよね」

「一年前は無理だった。でもそれは、オマエが最初から傍観者に徹したからだ 『無関心の災厄』」

「その名前、俺はあんまり好きじゃないんだけどね」

「だから今回は オレはシリウスを失いたくないんだ」
頼むから。

もう一度繰り返さないために、オレのコトバが何かに役立つのなら。

その瞬間、背後で水晶の爪がぶつかり合う音がした。

「マモルさん」

その光景が見えているはずの夙夜は、じっとオレの背後に視線を据えていた。

二人の戦いの一瞬一瞬を見守る様に。

「マモルさんの願いは、何？」

オレの願い？ 願いなんて高尚なもんじゃねえよ。
それは。

「シリウスとまだ遊び足りない」

「おーけい、マモルさん。任せて」

夙夜はそう言うと、一年前と同じようにネクタイを外してオレに

渡した。

この瞬間が一番オレの無力を感じる。

「今度は、何とかしてみせるから。見ててね、マモルさん」
だからオマエ、その台詞……天然タラシか。

夙夜は手に武器を持っているようには見えない。

いったいどうやってあの二人を止めるというのだろう　オレが無茶を言ったのがそもその原因なのだが。

夙夜は、とんとん、とその場でいくらかステップを踏み、じつと二人のぶつかり合いを見た。

珪素生命体であるシリウスは当然のことながら、それを相手にする白根の動きも尋常じゃない。まるで、特撮映画でも見ているかのように、重力を感じさせず、軽々と空中で爪を交えている。

が、夙夜は二人の着地を狙って地を蹴った。

着地の瞬間、白根の手首を目にもとまらぬ動きで捻りあげ、その手に握られた水晶の爪でシリウスの攻撃を受け止めた。

がざん、と凄まじい音。

硬度7の水晶同士がぶつかり合った。

夙夜は白根の手首をきめたまま、大きく横に屈んだ。

「ちよつとごめんねっ」

振り回された白根の細い肢体が宙に舞った。

その手に握られていた水晶の爪の一つは、夙夜の手の内へ。

「シユクヤ、邪魔しないで！」

「そう言うわけにもいかなくてねっ」

攻撃の軌道に水晶の爪が閃いて、シリウスは大きくバランスを崩した。

そのまま芝生へ倒れ込み、夙夜はそのまま抑えつける。
そこへ、残った爪を振りかざした白根が襲いかかった。
刹那、時が止まったかと思った。

「武器を納めて」

夙夜は強い口調で言った。

それも、片手でシリウスを抑え込み、もう一方の手で白根の手首を握りしめながら。

穏やかな口調でも、夙夜の内秘められた刃が鋭利に研がれているのが感じ取れるほどの力強さだった。

とんでもない力　アイツの能力は、底なしか。

いや違う、アイツは力の使い方がうまいだけだ。質量差のある相手の力をつまく利用して抑え込んでいるだけ。そういう力の遣い方が、本能的に分かっている。

白根も悟ったのか、ずっと彼女の武器を退いた。

15 : ケモノの呟きと道化師の雄叫び

静けさの戻った校舎の裏。

闇夜に薄暗い灯で、全員が浮かび上がる。

「『ケモノ』、そして柊護さん。現在の状況を知ってください」
荒い息で、白根はオレたちに告げた。

「国家組織は既に珪素生命体の事を嗅ぎつけました。このままではこの個体は近日中に捕縛されるでしょう」

オレは答えなかった。

「収拾が非常に難しい事態に陥っています。私たちが収められるかは、予測不能です」

私たち 白根の背後にある組織。

「ですから、私がすべての責任で以て片付けます」

「どういう事だ？」

「その珪素生命体シリカを捕獲し、すべての元凶は私であったという事実
に書き換えを」

「なっ……」

それは、白根がああ殺人事件の犯人として投降するという意味だ。
「そうしたら、どうなるの？」

シリウスの純粋な興味。

白根は、腕の傷を押さえながら淡々と答えた。

「人間の社会には、規則が存在します。そして、罪を犯したモノはその規則に沿って裁かれます。犯した罪と同じだけのモノを返されるでしょう」

「同じだけ……？」

首を傾げるシリウス。

「じゃあ、ボクも消えたらいいって事？」

「……！」

純粋が故、率直。実直。

そして、ケモノに近い素質を持ちながら人間の思考を与えられてしまったアンバランスなこのネコに、消滅への恐怖はなかった。そんな結論は誰も望んでいないのに。

「違います。私は爪で切断されてしまった彼女を即死と判断し、すぐにその場を離れました。そして、男子生徒が発見し、あの騒ぎとなりました」

白根の声が静かに響く。

「彼女を殺したのは私です」

「でも、ボクが『犯した罪』は、そういうモノなんでしょう?」
罪。

そうだ、シリウスが萩原の命を奪った事は事実。

言葉を失ってしまったオレを見て、聡いネコの子は理解する。

「それに、ボクが存在で、ボクの仲間は同じ目に遭う」

そんな事はない、と言えない。

何しろ、シリウスの言葉は^{ホントウ}真実だから。

もし彼が国家組織の方に捕まれば、確実に^{シリカ}珪素生命体全体に危害が及ぶ事は否めない。

「だから」

でも、駄目だ。

その言葉は、朽ちない筈のオマエに引導を渡す最後の刃。

「ボクが消えればいい」

「やめろ、シリウス!」

それ以上の事を口にしたら。

それ以上の事を望んでしまえば。
^{ホントウ}

真実に消えてしまうから。

朽ちない^{シリカ}珪素生命体を唯一無に帰すマイクロヴァースが、シリウスの思いに反応して発動してしまう。

「やめろっ……だってオマエ、まだ名前もらって少ししか経ってないだろうがっ」

ついさっき。

ほんのついさっき、あのヤマザクラの下で先輩がつけた名前。

「名前つてのはヒトに呼ばれるために在るんだよ！　オレはせつかくのオマエの名前をもっと呼んでやりたいんだよ！」

一年前の懺悔。

アイツにも、もつと笑わせてやりたかった。

「オレはオマエといて楽しいよ。だから、もつと一緒にいたいと思う。それはシリウス、オマエも同じじゃないのか？　こんな時間に学校まで来たのは、そのせいじゃないのか？」

「ボクもマモルさんといて楽しかったよ。だから、マモルさんが悲しむのは嫌なんだ」

「だからっ」

何故伝わらない。

オマエが消えるとオレはまた悲しむのだという事がどうして分からないんだ。

「でも、ボクは名前を持つ『ニンゲン』を消した。マモルは悲しかったんでしよう？　それにこのままだと、ボクと同じ珪素生命体シリカが大変な目に遭うんでしよう？」

「誰かを消したから自分も消えるなんて、そんなめちゃくちな論理があるか！　罪滅ぼしってんなら生きて償え！」

「償うつて、ナニ？　生きるつて、ナニ？」

蒼い硝子玉。

そこに感情はない。

いつもぴんと立っていた尻尾は、地面にぐったりと横たわっていた。

「ボクはマモルを悲しませた。仲間にも、酷い事をした。でも、ボクさえ消えれば問題ないんでしょ？　だからボクは消えるよ」

ダメだ、もう。間に合わない。

言葉が出ない。

「さよなら、マモル」

「シリウス　！　消えるな。オマエまで消えたら、オレはまた悲

しむだろうが！ またオレにあんな……」

血。切断面。顔。

銀色。消滅。ヤマザクラ。笑顔

「またあんな辛い思いなんて」

我儘な言葉だ。

こんな我儘じゃ、きっとシリウスには届かない。

「行くなっ、シリウス！」

まだ名前を呼び足りない。

これからもっと、何度も何度も呼んでいくはずの名前だったのに。

「シリウス！」

ああ、シリウスのこの笑顔は、とてもよく覚えている。

きつとそれは、笑わない珪素生命体シリカが唯一赦された笑顔なんだろう。

ねえ、先輩。

『コトバは魔法だ』なんて、本当はウソなんだろう？

口先でイキモノの生死を変えられるのなら、この世に死なんてモノは存在しねえ。

たった一言、『レイズ』というだけで蘇る、そんな御伽話は、創りモノの中にしか存在しないんだ。『光あれ』って出来る眩い世界なんて、空想の産物なんだ。

王子様のキスで生き返るってのなら、オレは何度だってそのヤマザクラの幹に口付けてやるよ。

バカ野郎。

オレには、いつだって何も出来はしない。

どんな言葉を使ったって、どんなに考えを巡らせたって結局、梨鈴もシリウスも救えないから。

本当にコトバが魔法だというのなら、オレにシリウスを救う魔法を教えてください。

今なら薄っぺらいオレのプライドなんか全部捨てて、本当のバカ野郎はオレだと認めたうえで、それを知るヤツの前に跪いてもいいから

でも、オレの祈りは届かなかった。もしくは、届いても間に合わなかった。

オレたちの見ている目の前で、シリウスはやっぱりサクラより星空より美しい最後の笑顔を残し、美しい銀色の光を放ちながら。風の中に、まぎれて、何もかもを、無に帰した。

静かな校舎に、オレの絶叫が響き渡った。

そして静かな、悲しげな夙夜の懺悔が夜風に響いた。

「ごめん、マモルさん」

オマエが謝ることじゃない。

そう言いたかったのに、オレの喉からは呻き声しかでなかった。

まるで悲哀を助長するかのように、サクラの花が散る。

真夜中の学校で、消えていった二つを導くように。

悲哀を呼び込んだ完全なる美の罪を問うかのように

また何も救えなかった道化師をあざ笑うかのように。

そして、無関心に災厄を導いた本人を責めるかのように。

これですべてが終わった事だと告げるかのように。

16 : 無関心ともう一つの花言葉

白根は何も言わなかったし、もちろん夙夜も黙っていた。

あの二人が黙っているのだから、オレが口を開くわけにはいかな
い。

だから、シリウスだけがなかったことになった。

そして、一番後ろの端の席は学校が再開してもずっと空席のまま
で、オレたちの教室からは二人の人間が減り、転校生の白根が増え
た。

犯人がこの世から消えてしまった以上、警察の捜査に何の意味も
ない。

あれから平和に学校生活を送っているオレの与り知らぬうち、い
つの間にかフェイドアウトした事件は、きっと、たぶん、夙夜の叔
母だとかいう国家権力によって鎮静されたのではないかと邪推する
時折、街の中での若い刑事を見る事もあるが、特に何も言っ
てこないところからも、珂清さんの権力の強さは伺い知れる。
いったい何者だ。

本当に？

本当になかった事になるのか？

何もかもを無に帰すマイクロヴァース。

一人ですべてを作り出したっていう千木良博士、それに 夙夜。
アイツが無関心なことは分かっている。

今回だって、気まぐれでオレに手を貸し、気まぐれで転校生に興
味のあるフリをし、過去の梨鈴への興味からシリウスにも興味を示
した。

人間である事を継続するためにあやって行動しただけだ。
アイツの中に、特別ななんてものはない。

分かっているけれども、オレもその無関心の対象で、あのネコもその対象で、実はキツネも先輩も白根も、アイツの周囲に存在する何もかもがそうだっていうことに、オレは悲しんでもいいだろうか。どうして悲しいのかはわからねえ。

でも、もし昔の偉いヒトが言っただように『好きの反対が無関心』だっていうのなら、オレはいつちよまえにアイツに好かれたがってるってことなんだろう。

そんなこと、認めたくもねえよ。

オレがアイツに興味を持っていて、さらにアイツがオレに興味を持つ事を望んでいるだなんて、滑稽にもほどがある。

ああ、本当に滑稽だ。

この話を先輩にしたら、いつものようにくすくすと笑ってくれるだろうか。

ああ、なんてくだらねえ。

桜崎通りの一本奥の道、ひっそり佇む花屋『アルカンシエル』。

オレはその花屋の扉を開けた。

「いらっしやいませ、ですう」

相変わらず可愛い声でオレを出迎えてくれる。

「あつ、マモルちゃんです！」

花の国のアリスと化した文芸部の先輩は、嬉しそうにオレに向かってたたと駆け寄ると、いつものように腰の辺りにタックルをかけた。

「い、いてえ……いつもにもまして威力が……！」

「元気そうでしたのです」

にこにこ笑う先輩に、オレは文句を引っ込めてため息一つ。そして、つられて笑い返しながらかげた。

「笑われにきました」

事の顛末と事件の真相を話し終えたオレは、全身を酷い脱力感に襲われていた。

「悲しいのです。シリウスくん、消えちゃったのです」

梨鈴の時と同じ言葉を口にして、先輩は悲しそうな顔をした。

「すみません。今度も、オレには何も出来なかった」

オレも、一年前とまるで同じ台詞を吐いた。

「先輩。コトバは魔法になるなんて、ウソなんですか？ オレの言葉じゃ、シリウスを救えないんですか？ 萩原も、梨鈴も、シリウスも、誰ひとり救えないんですか？」

とんでもなく我儘な言葉を続けたオレに、先輩は優しく笑う。

「それは違うのです」

「何も違うない！」

ここでこうやって声を荒げられるのは、オレが先輩に頼りきって甘えているからだと分かっている。

それでも、胸の底にたまった思いを吐き出したかった。

「夙夜は、アイツは何でも出来る。でも、何もしようとしない。あれだけの能力を持つていながら、活用する事を知らない」

「それはアノ子が『無関心の災厄』だからなのです。何もしようとしないのでなく、何も出来ないのです」

分かっている。

アイツがああやって生きているのがわざとじゃない事、それはずっと隣にいたオレが一番よく分かっている。

「それでもオレにはなんの力もない……！」

「違うのですよ、マモルちゃん。マモルちゃんが認めようとしただけなのです。マモルちゃんの中にケモノはいないのですが、その代わり、ケモノの対局のモノが在るのです」

先輩。

オレにはそんな力はないよ。

「『道化師^{シエロ}』さんは、ケモノを従える事も出来るのです。そして、みんなを喜ばせる事も出来るのです。コトバは魔法、それはウソではないのです。でも、ホントウでもないのです。コトバを武器にして相手を傷つけるのは簡単ですが、それを治すのはとっても難しいのです。軀^{カラダ}についた傷も同じです。そして、そのコトバの使い方を決めるのは、マモルちゃん自身なのです」

誰ひとりだつて救えやしないよ。

「シユクヤくんはすでに『無関心の災厄』として完成してますです。でも、マモルちゃんは『口先道化師』としては未熟なのです」

先輩は、細い腕をいっぱいに伸ばして、オレの頭を抱き込んだ。

それに合わせて腰を折ると、ふわりと甘い匂いがした。

これは、花の匂いだ。

「もつといっぱい悩んで、いっぱい勉強して、マモルちゃんは素敵な魔法使いになってほしいのです。それがワタシとシユクヤくんのお願いなのです」

ああもつ、そんな事言わないでよ、先輩。

そんなこと言われたら、またオレは過ちを繰り返すちまう。

そっち側の世界に入りたいと、思ってしまう。

「先輩……」

「なんですか？」

「オレ……もつと、アイツに近づきたい。アイツだけじゃない、白根や、先輩の近くに行きたい」

オレははつきりと自覚した。

自分だけがモノガタリに関われない事が悔しいと。アイツらと同じ目線に立って、様々な出来事を迎えてやりたいと。

「ワタシも、そう思いますですよ？」

そう言つて、優しい花の国のアリスはオレの頭をそつと撫でた。

やべえ。ほんとにやべえ。

これ、奥で珂清さんが聞いてたとかいう最低のオチはねえよな？

さつきまでのカツコ悪い姿はなかった事にしたいのだが。

先輩に弱音を吐きまくって、励まされまくって、ようやく落ち着いたオレは、ばつ悪く鼻の頭なんて擦りながら、誤魔化すように言った。

「『イベリス』の花言葉、オレも調べたんですよ」

「そうなのですか？」

「はい」

珍しく図書館へ足を運んで、そしてぺらぺらとページをめくってでも、それだけの手間をかけた価値はあった。

「イベリスの花言葉は『無関心』。それから、もう一つ『心を惹きつける』。二つ、あったんですね」

「ふふふ、正解なのです」

につこりと笑った先輩は、また花を差し出した。

「これは正解のご褒美です」

今度の花は鉢植えで、薄い花弁が大きくぱつと開いているのが印象的だった。淡い桃色の花は、先輩の来ているユニフォームと同じ色。

ああ、そうだ。夙夜の叔母の国家権力でもある花屋の店長にコスチュームのお礼を言い忘れていたのだった。

まあ、それは今度でいいか。

「また来ますよ、先輩」

「いつでも待つてるのです」

店を出て、花の鉢を抱え、学校に向かって坂を登る。

仕方がない、もう一回図書館まで足を運ぶか。

それとも、ヤマザクラとシラネアオイの花言葉を即答したマイペースなオレの同級生は、この花の花言葉も知っているだろうか？

- - : プリムラとイベリスとシラネアオイ

花屋を出て、まっすぐ高校の文芸部部室へ直行し、その扉を開けたオレは愕然とした。

そして、たつぷり30秒は部屋の中を見渡した後、窓際でのんびりと外の様子を眺めている同級生に向かって指を突き付けた。

「おい、そのマイペース」

「ダメだよ、マモルさん、ヒトを指でさしたりしちゃ。それに俺の名前、マイペースじゃない」

「うるさい、それは初対面で同じ事をしくさった、白根にも言うてやれ」

そう言うて、オレは部屋の中央あたりでパイプ椅子に座って読書する黒髪の美少女にもう一度指を突き付ける。

「現在の文芸部員が2人って事を考慮すると、この『無表情美人』を部室に招き入れたのはどう考えてもオマエじゃないんだが、その予測は間違つてないよな？」

「うん、そうだねえ」

そうなのかよ。

しかも白根は、シリウスの身代りに捕まるのではないかと思っていたのだが。

「白根、警察はいいのか警察は」

「その提案は承認されませんでした」

ああそうですか。

オレの心配はなんだったんですか。

気が遠くなりそうなオレに、夙夜は首をかしげながら尋ねた。

「ところでその花はどうしたの？」

「あ、これか？先輩がくれたんだ」

「『プリムラ』だね。花言葉は『運命をひらく』」

運命をひらく。

図らずも、オレがそっち側の世界を選んだように。

まさか先輩、マジで夙夜と共謀してオレを『口先道化師』として育てようとしてるんじゃないだろうな？

「私の命題はすべて証明され、第一命題は『ケモノの監視』となりました。これから、私はここに滞在する事になります」

「よかったねえ、マモルさん。一人部員が増えたよ！」

ああ、そうだな。春だからな。

新人生勧誘……もうめんどうだからいいか。始業式からのゴタゴタで、どの部活も勧誘なんて忘れてるし。

こうしてほとんど活動していない文芸部の部室からは、卒業式に一人減り、始業式に一人増えた。

まさかコレで大団円、なんて、言わねえだろうな。
オレはぜったいに認めねえぞ。

でも、オレはこんなめんどくさいヤツは嫌いじゃねえ。

それに、こんなめんどくさい毎日も、オレ自身も、もちろんこの世界も 嫌いじゃねえよ？

たとえばそこで生じるモノガタリに、オレが付け入るすきなぞ残されていなくとも。

運命をひらく

世界がオレを選ばないなら、オレが世界を選ぶから。

了

・ ・ ・ プリムラとイベリスとシラネアオイ（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました！

この作品は、企画参加作品です。「春・花小説」で検索すると、素晴らしい作家陣の春の花と花言葉にまつわる作品を読む事が出来ますので、ぜひどうぞ。

自分の作品はもう最後の方は花も花言葉も全く関係なくなっていたのですが……（――；）

本当にすみません。

しかもやたら回りくどいだけで結局なんにも解決してない。読める方は相当イライラされたと思いますが、書いてる方も実は四苦八苦でした。

うまく伝えられるよう、もっと精進していきたいと思います。

それぞれのイメージフラワーとしては、

・ 柊 護 プリムラ「運命をひらく」

・ 香城 夙夜 イベリス「無関心／心を惹きつける」

・ 白根 葵 シラネアオイ「完全な美」

・ 梨鈴 ヤマザクラ「あなたに微笑む」

でした。

わけが分からない感じに絡んでいた過去話は「無関心の災厄

ヤマザクラ」として掲載しています。もしよろしければそちらもどうぞ。

ほとんど謎が明らかになってないので（アオイさんの組織とか…

…）また続きを連載してしまうかもしれません。その時はまたぜひ
よろしく願います。

拙い作品ではごさいましたが、感想などいただけると非常に喜び
ます。

本当にありがとうございました！

4 / 8 追記

続編「無関心の災厄 ワレモコウ」（<http://ncode.syosetu.com/n8491g/>）を掲載しました。

もしよろしければどうぞ。

参考サイト

「花言葉 Floword」 <http://www.floword.net/>

「串間洋蘭」 <http://www.kushima-orchid.co.jp/>

おまけ1 「登場人物紹介」(前書き)

ここからはおまけです。多少次回のネタバレ。

おまけ1 「登場人物紹介」

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

この先はおまけとして、簡単な登場人物紹介と次回作の予告を載せました。

よろしければどうぞ。

*****「無関心の災厄」 登場人物紹介

【柊 護】（ひいらぎ まもる）ノマモルさん、マモルちゃん

17歳、高校2年生。173cm。まだ伸びるらしい。

勘が鋭く、よく口が回る。

記憶力はそこそこの思考力は高く、スマレほどではないが人の根底を見分けるのは得意である。

『口先道化師』『名前だけ主人公』『傍観者』『部外者』

プリムラⅡ運命をひらく、ヒイラギⅡ機知・先見の明

【香城 夙夜】（こうじょう しゅくや）ノシユクヤ、シユクヤくん、ケモノさん

17歳、高校2年生。177cm。もう伸びないかも。

五感が優れており、感覚に対する記憶力と照合力は常軌を逸している。

そのわりに人物・言語などに対する記憶力はゼロに近い。

分かっているけど、聞かないと答えない。すこしぼんやりしている。よく流される。失敗すると分かっているけどとくに止めない。それが自分にとって損だと分かっている。

甘いもの大好き。とくにプリンには目がない。

『無関心の災厄』 『野生のケモノ』 『天然マイペース男』 『プリン魔人』

イベリスⅡ無関心・心を惹きつける

【枝守 スミレ】（えだもり すみれ）／先輩、スミレ先輩、花屋さん

18歳、高校3年生。152cm。ちっさい。

いつも楽しそう。半端に敬語。

相手にあだ名を付けるのとマモルに突撃するのが趣味。

なんだかまだいろいろ隠している。

『ゴッドファーザー』
『名付け親』 『伯楽遊戯』

スミレⅡ誠実

【白根 葵】（しらね あおい）／白根、アオイさん、アオイちゃん

17歳、高校2年生。162cm。

常に冷静。口調がロボットっぽい。

身体能力は非常に高く、水晶の爪を使って戦闘する。

『無表情美人』 『転校生の美少女』 『作業機械』
『ロボット』 『完全な美』

シラネアオイⅡ完全な美

【香城 珂清】（こうじょう かすみ）／カスミさん、叔母さん
29歳、178cm。すらりとしたモデル体型。
環境庁下の珪素生命体に関する組織に属する。一般的に非公開の
国家組織。

美人。さっぱりしている。口調が男前。

『国家権力』『アルカンシエルの店長』『養い親』

カスミソウ＝無邪気、魅力

【望月 桂樹】（もちづき ケイキ）／伝道師、ケイキさん
25歳、アオイの組織の研究員。189cm。でかい。
黒髪を細く後ろに纏めて流している。眼鏡のフレームちっちゃく
て青っぽいレンズ。

人を馬鹿にした態度。謎かけが大好き、マメルが大好きですぐち
よっかいをかけてくる。

『エヴァンゲリスト
災厄の伝道師』

月桂樹＝栄光・勝利

おまけ2 「次回予告」

続編「無関心の災厄」 ワレモコウ」のプロローグです。
企画作品としては間に合わなかったので、次回予告としてあちこち切り取っておまけに投稿しておきます。

*****「無関心の災厄」 ワレモコウ」 予告(?)

この世で最も恐ろしいイキモノは人間^{ヒト}だ

昔、漫画^{ホントウ}だかアニメ^{カソ}だからで、こんな台詞を見た事がある。

この命題は真実^{ホントウ}で、虚偽^{カソ}だ。

ヒトほど卑屈で、卑怯で、卑下する卑劣なイキモノは他に存在しない。

ただその脆弱さゆえ、ヒトは思考し、学習し、周囲を貶める事を自覚した。長い歴史の中でヒトはその力に目覚め、使い方の試行錯誤を繰り返してきた。

だからこそ、ヒトは恐ろしい。

その武器は頑丈な牙ではなく、鋭利な爪ではなく、ましてや骨でも筋肉でも^{カラダ}軀全体のどの部分でもなかった。

ヒトが武器として選んだのは、『言葉^{コトバ}』という形無きモノだった。牙よりも頑丈にヒトを縛り、爪よりも鋭利にヒトを傷つけ、時に不可能と思われる治癒の力さえ持つ『言葉^{コトバ}』。

それは、ヒトが持つ唯一最強の武器。

武器をいかに巧みに操るかが、どれだけ強いかという証となるのだ。

しかし最後に付け加えるならば、この命題には一つだけ条件がある。

それは、この命題を使用する本人もまたヒトである事

長い枕詞になったが、要するに何が言いたいかって言うと、オレは今現在、目の前に出現した人物に恐怖している、というたった一文を導きたかっただけなのだ。

限界まで握りしめた拳は、とつくに感覚がなんぞ残っていない。首筋がすうっと冷えるのは、きっと汗が蒸発していく所^{セイ}為だ。

「キミは不思議やなあ」

コトバは魔法なのです。それは、見た目は最上級の可愛い女の子でも中身は『名付け親^{ゴッドファーザー}』であるオレの先輩が、いつだったか言っていた事だ。

オレはその言葉を疑っていた。未熟なオレにはまだ魔法が使えなかったために、魔法の存在自体を疑ったのだ。

でも、違う。

この世に魔法ってのは存在する。それは、時にヒトを縛り、戒め、殺し、傷つけ、癒し、嬲り、弄ぶ。ヒトが扱う最強の魔法だ。

現実にオレがここで硬直しているように。

「見た目も、能力も、経験も……なんもかんも全く一般人やいうんに、あり得んほどめっちゃめっちゃ強い極性を持つてはる」

オレのすぐ目の前に佇む細い眼鏡の男は、さも可笑^{オカ}しそうに目を細めた。

細く束ねた長い黒髪が風に靡き、風を巻き込んで翻る。

「キミは真^{ホン}実に不思議やわ」

もう一度同じ台詞を吐いた『災厄の伝道師^{エヴァンゲリスト}』は、オレをその場所

に釘付けにしたまま、口元を笑いの形に歪ユガませた。

楽しそうに石畳を飛び降りていく隣の夙夜を見ながら考える。
そんな事は絶対にはないと思うのだが、もし、コイツが本気で、一つの目的を持ってその能力を使い始めたらいったいどうなるんだろう、なんて考えて不安に思う事がある。

能力に無頓着であるがゆえ、ギリギリラインで保つ事の出来た人間性はけし飛び、おそらく夙夜は『野性のケモノ』の本性を現す。
それは果たして、いつたい、ヒトなんだろうか。

オレは、あの伝道師エヴァンゲリストからコトバの恐怖を受けることでヒトである事を実感した。

しかし夙夜はどうだろう。

果たしてコイツはヒトであり続ける事が可能なんだろうか？

「柊護ひいらぎのりさん、香城夙夜かうじゆくやさん、そして、枝守スミレえだもりさん」
白根は、いつもと同じように淡々と、静々と肅々と、オレたちの名を呼んだ。

これは終わりなんかじゃなかった。

「以上3名に対する説明許可申請が受理されました」

もう逃げられない。

「本人の許可を求めます」

自分で望んだことなのに。

オレはこの世界に触れたいと。

「いいよ」

「いいですう」

どうしてこんなにも恐怖に喉が震えるのだろう？

「……いいぜ、白根」

虚偽ウソかもしれない。

真実ホントウかもしれない。

もしかすると、そんなコタエは存在しないのかもしれない。

それでも、オレは。

「ちようどお前が何者か知りたかったところだ」

誰か震えを止めてくれ

こんな最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5443g/>

無関心の災厄

シラネアオイ

2010年10月8日14時44分発行